楽しいこと以外全部ウソの叙事詩

飼い犬には革紐に繋がれた自由がある。
人間にも革紐という宿命に繋がれた範囲においての自由がある。
私たちは自由意志があることの意味をきちんと理解できているだろうか。
もしも、自然法則や社会秩序に適応する能力のことを自由意志だと信じているのならば
あなたはあなたの自由意志の拠り所である世界の終わりに裏切られることとなるだろう。

多くのことは必要がないと思っている。
多くのものがただ在るものだと考えている。
多くの人々は「私」の用意した「自分」の鏡だと認識している。
多くのことを捻出しているこれらの「心」をどうにか伝えたいのだが簡単ではない。
簡単ではないことを伝えるのは難しい。
難しくしているのはいつだって必要性であることはわかっているのだけど、そのわかっていることの知識を知恵に変えて、知恵を叡智に基づいて必要性が必要ではないことを伝えなければならないのが難しい。
ただ、困難なことは大抵の場合は正しい、とニコラス・ケージが教えてくれたことがある。
でも必要性の不必要を伝えると私は世界の悪者になってしまうことからやはり難しい。

私「その心は必要な物も事もこの世界には、一切無い、という意味なのです」
世界「では光も酸素も米も必要ないのですか？」
私「はい、必要としているものではありません」
世界「では必要としないでいられている所を見せてください」
私「私はきっと死ぬに違いないと思ってますよね」
世界「あなたがクマムシでないならばきっとそうなるでしょうね」
私「私はクマムシではありませんが、クマムシを超えた存在であることは確かです」
世界「では、あなたがクマムシ以上の存在であることの意味を教えてください」
私「私は存在しないことによってクマムシ以上の存在であるということです」
世界「仏教ですね」
私「般若心経の方が近いです」
世界「それ仏教ですよね」
私「仏教です」
世界「まさかとは思いますが、存在の有無、についてを仏教思想で代弁するつもりですか？」
私「まさか、仏教徒です、と間違って言った日には宗教やってる人になるじゃないですか！」
世界「なんか我々の世界を支えている宗教がまるで悪い組織みたいな言い方をしますね」
私「いや、それはあなた方が宗教観念に基づいて歴史を作ってきたからでしょ、サリンとか、戦争とか、間違った裁判とか、今でも歪んだ価値観の扇動をしていますよね」
世界「そういう面も確かにありますが、歪んだ価値観、とはどう言ったことですか？」
私「だから必要のないことをさも必要かのように人間社会を扇動し続けている、その教育と文化の精神のことを歪んでますよね、と伝えているのですが聞こえませんか？」
世界「我々は必要のない物は存在しないと考えているのですがわかり合えませんか？」
私「その考え方が諸悪の根源なんです」
世界「では、あなたは全ての存在が悪であるという立場で良いですか？」
私「月並みですが、必要悪、として認めざるを得ない立場にあると思ってください」

世界「必要悪とはずいぶんな言い草ですね」
私「ですよね」
世界「今の所、全人類の七〇億人の活動を必要悪としたことで、あなたは炎上しています」
私「お前らはやはりクマムシ以下のカスだ」

人類とは必要性の檻の中で「自分」という自尊心を携えて現れた革紐に繋がれた犬だ。

犬は古屋に繋がれている革紐の長さの範囲において自由意志を有して活動している。
では、私たち人間はどうだろうか？
私たち人間の多くは誰も鎖に繋がれては活動していない。
どう見ても犬とは違う。
犬と人間はどう考えても違うことは私の立場からも明らかだ。
だがしかし、その精神が犬であり、猫であり、猿であり、その他全ての動物なのだ。
私たちが精神、意識、心、性格や意志及び自分と呼んでいる目には見えない部分というのが目に見えている動物と同じ状態なのだ、という論文でも提出した日には「人間の祖先は猿である」としたダーウィンの再来が如くアカデミーはアレルギー反応を起こして叩き潰しに来ることだろう。
実際のところ、ダーウィンの『種の起源』による生命の定義は一本の木であった最小の生物からの自然淘汰と突然変異による枝分かれのことを進化論とし、その優生学的な考え方は国家教育のイデオロギーにも取り入れられることで現人類の文化認識の価値観に強く浸透されている。
進化を遺伝子異常と自然現象でしか説明できず、その先が肝心なのに、わかった気でいる。
当たり前のことだが、私たちの常識や考え方は歴史的勝者による権威によるものだ。
正しいものが勝つのではない、強かった者が正しいというのが昔からの世界のルールで私たち人間を含む自然はプログラムされている、というのがダーウィンの世界観だ。
実際は誰も競争も闘いも行っていない、ただ共存しているだけだが、人間の精神だけが善と悪の動機を有してストロングポイントとウィークポイントを探り合っている。
もちろんダーウィンの進化論は二〇〇年前の古典とされていることから、最新の理論ではもっと多様な概念を包括した進化の可能性を示す仮説があるのだろうが、どんなに科学技術の効率化を果たしても、若い研究者や指導者による新しい考えとやらが歴史的な秩序を築いてきた権威に基づいた考え方の視座にある限り、人類は自ら明らかにしてきた自然哲学の臨界点と突破すことができない袋小路での議論をし続けることとならざるを得ない。
なぜなら、現在の私たちの知性は「死」の持つ意味がわからないままでいるからだ。

だから、何のために生きているのかもわからない。

だから、何が正しいのかも生きるためであるならば殺人も正当化されてしまう。
だから、せめて愛することを懸命に信じようとするけど愛と性欲の違いもわからない。
だから、せめて大切な人と過ごす時間だけはと思うもなぜ大切なのかがわからない。
ただ生きていてほしいし、生きていたい。
そう願うことだけは絶対的に正しいと信じているのだろう。
たとえどんなに醜く、残酷で、品がなくとも自分とその周りへの願いは正しいのだ。
では、その願いが何のためであるのかを考えた時、自分が悲しい思いをしたくないためなのか、大切な人が苦しい思いをしてほしくないからなのかがそれぞれにある。
だからどのように生きるべきまでが願いのセオリーにはある。
どのように生きることが私たち人間であり生命にとって正解なのか、どのように死ぬことが美しく素晴らしいのかがわからないままなはずなのに、人間の世界のあり様は歴史的にも空間的にも家族的にもどこもかしこも願いのセオリーに基づいた毅然とした正しさに満ちている。
次の瞬間に命を落とした時のそれまで生きてきた時間の価値や死の意味は依然不明ではあるが、そんなことは知ったことでない、今生きていることがすべてであり、死んだ時は死んだ時に考えれば良い、とでも思っているのが多くの人間の死へのセオリーなのだ。
なぜ自分という概念が存在していて、なぜ世界は自分の存在の生存を許すような構造があるのか、その構造がどうして宇宙空間であり、地球という奇跡的な環境を有した天体によるものなのか、肝心なところどころか存在についての詳細は科学でも哲学でも手も足も出ないレベルで根本的なことがわかっていないこともまたきっと、私たちの願いのセオリーである「ただ生きていたい、生きていてほしい」の前では大切なことに含まれていない。

その結果、天地が地獄に呑まれようともそれは自尊心にとっては正しいことなのだ。

私もその中の一人であり、一人だった。
若い頃の私は度し難いほどに無知で無謀で無頼だった。
一芸に秀でる者、百芸に通ず。
いわゆるプロフェッショナルな道に憧れる夢多き自尊心のあまり、公務員が何であるのかも知らず、サラリーマンの給料が学校の成績のようなもので決まり、この世界の報酬は純粋に個人のスキルと実力に比例しているもの、つまり何のプロフェッショナルなのかを競うゲームのような世界観で社会はできているものだと思い込んでいた。
私はその世界観の中で平均よりも少し下だった、と思う。
各ジャンルに突出した才集団がいることを考慮すると底辺だったし、今も底辺だ。
２０歳を過ぎてもプロフェッショナルを追いかけてきた自尊心を持つ私は消えることはなく、就職もせずに、バイク便のバイトしては海外を旅行し、冬になったらスノーボードのインストラクターで稼いではまた海外に赴く、といった後先考えずにただひたすらに自分

が良いと思うがままに人との関係を彷徨い渡り歩く傍若無人の流浪人だった。

転機は私の肉体に別人格が出現した時のことだった。

ある時ボードで遊んでいる際に後頭部を強打し別人格が私の身体に現れたことがあった。受身なしの不意の衝撃が何によるものなのかがわからないくらいに急だった。それでも気を失うことなく激しい痛みを堪えながらどうにかこうにか安静にできる場所に落ち着くと、なんとなくぼーっとし始めたところから抗えない眠気と脱力が何となくきてるなという感じを受け取ったのを最後に私の意識と記憶はそこで途切れた。

再び気がついた時には一緒に遊んでいた仲間達が私を囲んでざわざわと安堵していた。どうやら私の意識と記憶が失われると入れ替わりで、明らかに私ではない何者かが勝手に私の肉体を通じて、話し、動いて、遊んでいたというのだ。

周りにいた仲間たちははじめの内は面白がっていたようだが、やがて大人しくなった頃に「ここはどこ?あなたは誰?お前なんでここにいるの?」などというセリフを何度も何度も何度も繰り返しに繰り返す壊れたテープレコーダーのような私の状態が周囲にはさすがにホラーだったことから本気で心配し始めた頃に別人格の私は電源が切れたロボットのように動かなくなったことを境に横になったところで私は戻ってきた、とのことだった。

どこから戻ってきたのかは当時の私はわからないし、知らないけれど、今の私にはわかる。ただ、当時を回想するならば、戻ってくる直前というのは遠くで騒がしくしている様子の感じがだんだんと近づいてきて、やがてゆっくりと瞼を開けることでまるで水の中にいたかのようなぼやけた視界が通常運転のクリアな風景へと焦点が合わさることによって、着なれた衣服の感じと私という当たり前の感じが身体にフィットしているのを思い出し、確認できたことで私は自分が気を失っていたことを自覚したのだった。

特に痛みも後遺症もなく、まったく何だったんだよ、くらいに軽く受け止めているふりをしながら自分に起こっていたことのあらましを周りの人間から聞いたことを整理するとこういうことだった。

雪を初めて見るような子供みたいな性格だった。

何を言っているのかはわからないけど大はしゃぎしていた。

時間にしたら五分くらいそいつは出現し続けていた。

上手いこと勝手にリフトを降りて、勝手にゲレンデを降っていった。

急に座り込んで会話ができたのだが、記憶喪失のような感じだった。

まるで漫画や小説に出てくるフィクションのネタキャラかよ、と思えるくらいに半ば笑い話のような感覚で陽気に情報収集に努めてはいたが、些か冗談が過ぎると思うようになるまでにそう時間は必要としなかった。

気を失っている間に自分以外の誰かが自分の身体を勝手に使っていたなどということを想像した時に巻き起こる私たちの感情がどんな印象を受けて、どんな混乱の嵐に苛まれる

のかはおそらく実際に体験してみないときっとわからない。
私がパニックになるトリガーのイメージはこうだ。

私の身体が勝手してる時の「私」はどこで何してた？だった。

その想像をするたびに意識は混濁し、空間が歪むような目眩を起こし、制御のきかない嗚咽から嘔吐を繰り返し、私の不在に関する想像の拒絶反応が凄かった。
そして眠るのが怖かった。
私の想像力は昔愛読していた野球漫画の中で頭部にデッドボールを受けた後の夜中に、デッドボールの影響から帰らぬ人となった物語を想起させてくることから、私もそれと同じようにもう二度と目覚めないかもしれないの恐怖に血の気の引く想いを漏れなく提供してくるのだった。
私以外の誰かの活動中の子供のような「私」とは何であったのかを思った時に、もしもそのまま元の私に戻ってくるという形式に成らなかったならば、少なくともこの世における「私」は私という存在の死及び消滅という結論に至らざるを得なかった。
つまり私は、一時的にとはいえ死んでいた、ということになった。
その事実を受け止めた心臓の動機が耳元で音を立てているかのように鳴り響く。
その脈動と関連してか、脳が溶けていくかのようでまともな思考が難しかった。
スポーツで敗北した時や失恋をした時のような前頭葉付近の軋みがひどかった。
どのくらい酷かったかと言えば、目玉の裏側を何かで鷲掴みされているかのような痛みがどんどんと脳の奥深くにまで開通させるべく抉るが如く勢いで持続し、そのあまりの気持ち悪さに嗚咽も伴うことからトイレから離れられない程度に苦しむ必要があった。
どうにかこうにか、これは私が勝手に大袈裟に考えすぎているだけで大した怪我というか出来事ではないのかもしれないのだから、と独りよがりに妄想を膨らませるのをやめさせよう、などという理性的な思考が無意味というか不可能というか役に立たないレベルで、脳は決して私の思い通りになるとは限らないパターンに入っていた。

だから私は仲間の一人と酒飲んで、弱音吐いて、セックスして寝た。

？「セックス最強！セックス最強！セックス最強！」
？「いい加減目を醒ませお前様よ」
？「誰？何？どこ？暗っ！怖っ！」
？「うわー・・・どっかの自尊心がそのまま来ちゃってるよ、やば、どうしよ、めんどくさ」
？「誰かいる？」
？「・・・」
？「何も感じない・・・何も無い・・・でも、自分だけがいる」

？「その自分という感覚がある限りここでは何も認識することができん。なぜなら、お前が自分だと思っているのは私がかつて吐き出したクソやゲロのような吐瀉物の一部に過ぎない、それがお前だ」
？「うわ、また、何このクソみたいなイメージが頭に直接垂れ流されてくる不穏な感じ」
？「まぁ、もう頭とか無いけどな」
？「頭がない？」
？「あー、わかった、お前、あの時飛んだお前か、私はその時のお前の前に立たされているわけな、わかりました、わかりましたよ、しゃーない、ひと仕事するか・・・」
？「え？俺死んだの？」
？「厳密には生まれてもいないから死ぬこともないんだが、とりあえず肉体は止まってる」
？「マジか！セックスして、眠りに落ちて、ご臨終とか最高かよ」
？「お前、明るいな」
？「てか、死んでるのに死んでない俺って何？」
？「お前な、お前はお前が自分だと思ってた肉体の生命体が育ててくれた魂体、悟性魂状態の自尊心にして私の意識（自我）の分体だ、一言で言うといわゆる魂というやつだ」
魂「魂ってやっぱあったんだ・・・じゃあ、あんたは誰？」
？「私か？私はお前さんの自我だ」
魂「自我ってどういう意味？自分ってことじゃないの？」
自我「お前さん方の自分は地上の主体としての肉体のことだけを指す狭い意味でのことを自分及び自我と呼んでいるようだが、実際にお前さん方が、自分、と想起することができるのは今のお前さんが見ることのできない私の権能によるものだ」
魂「自分の想起？」
自我「早い話が肉体を失っても自分って概念があるだろ？その違った状態になってもまだ、自分、という中心を想起して考えを持つことができるのは魂だけじゃ無理ってこと」
魂「え？どういうこと？魂の俺が今俺って思ってる俺は・・・じゃあ、何？」
自我「だから私の分体」
魂「分体って分身ってこと？」
自我「もっというと分神でもある」
魂「じゃあ、あなたは神？」
自我「やっぱめんどいな、これやるからダウンロードしろ」
魂「は？ダウンロード？」
自我「いいから、そいつに触れろ」
魂「この稲妻みたいなやつのこと？」
自我「そうだ、そいつは我々の神の眷属が犠牲になって創造した領域の叡智の断片だ」
魂「いいの？」
自我「そういうことになっている」

魂「じゃあ」

『楽しいこと以外全部ウソの叙事詩』

どうやら私たちの生きている世界とは私たち人間が楽しいと思ったことだけで完成させ続けていて、神話や伝説の英雄譚のようなものの礎に成り立っている世界観を指さして絵空事の御伽噺として笑い飛ばしているが、自分たちもまた絵に描いたような勘違いした解釈の生き様を必死で生きていることの叙事詩を綴っている、とある。

例えば聖書は霊的なメッセージにより記されていることから霊的な解釈が求められる。

新約聖書、旧約聖書、そして全ての福音書に描かれている黙示録や外典は元は霊的な解釈を以て描写され、その元になった霊的なメッセージの源流は古代インドのヴェーダにあたり、それが東はバラモン教や仏教、西はペルシャのミトラ教やゾロアスター教へと伝わり、ギリシアとローマの文化期を境にキリスト教の経典として世界史上で最も読まれている著書として『聖書』は常に時代に応じた解釈をされながら現代にまで語り継がれている。

どうやらとりあえず『聖書』を読んでいる？

小説版で大筋は理解したつもりではあったが常に眠くて眠かった・・・

メルギブソンが初監督した映画『パッション』でイエス・キリストの壮絶な最後を知る。

その気になればキリストはユダ的な人類を滅ぼせたけれど、それをしなかったのか。

黙示録は昔のジャンプ漫画『バスタード』を読み返すことで再学習した。

あまりのエロさとその美麗な描写に震えたから大人買いをしたのではない。

黙示録の封印とラッパによる地上と人類の破滅の意味を作者がよく勉強していたからだ。

興味深いセンスと言わざるを得ない。

エマヌエル・スヴェーデンボリの『天国と地獄』はガチっぽかった。

いわゆるチャネリングの元祖にあたる人物なのだが、レオナルド・ダビンチやピタゴラス、アリストテレスに並ぶあらゆる学問に精通した天才的な学者で国家に登用されるほどの権威を有しながらある啓示を与ったことを境に、自らの霊視が見せてくる霊界の詳細の研究に没頭する道を生き様にしたその道に嘘が無いと思われたからだ。

逆に何が嘘なのかと言えば基本全部嘘なのだ。

何が本当で何が嘘かの見分け方は簡単だ。

利権に寄らず、自分の命を賭けて、権威に逆らっている意思だけが真実に近い。

だから、たとえ真実の意思であっても言葉にした瞬間に嘘が混じってしまう。

言葉及び言語はある程度相手に迎合されなければならないことによるバイアスが無意図的に働いてしまうために、必ず譲歩による過剰と不足が生じてしまう。

ゆえに、言葉にならない、しない、できない、の主観だけが真実なのだ。

その怨念や執着、未練、後悔の想いと動機といった生きることのなかったる古い記憶を、何千年と何億人もの人との間のそれぞれのやりとりの折り合いを言葉の論理で片付け続け

ていると、真実からどんどんかけ離れた文化的な関係が人間の社会には形成されていくこととなり、現在の常識的な認識に至っていることがわかってくる。

つまり、何が真実なのかと言えば「死」以外は全て虚構なのである。

私たちは美しい虚構の世界に人間として存在している。

だから現代における科学的という考えは物質という虚構の論理を述べているに過ぎない。

虚構といえども資本主義科学も真理であることには変わりはない。

だが虚構の真理だということだ。

現代人は物質が現象の一側面であるということを考慮に入れず、その数値と法則を以って論理と呼んでいることの意味が人間的な都合であるに過ぎない仮説であることを知りながら、人間的な枠組みの中での客観的論理の中で賛否両論を繰り返しているのだ。

例えば「ダチョウの頭が悪すぎる」と指摘した人がいたとする。

ダチョウは基本的に何も覚えられない。

ダチョウは考えることもできない。

ダチョウは一羽が走り出したら発作のように全員が走り出す。

なぜ走るのかは本人たちもわかっていません。

だから、ダチョウはバチクソに頭が悪いというのは人の論理だという視点を欠いている。

人間は人間の視点にしか過ぎないことをあたかも万物の論理であるとしていることに気づいていないという視点において虚構の論理を知性だと勘違いしている存在であることにあまりに無知である立場にも関わらず自らを霊長の頂点にして支配者などとしているのだ。

ちなみにダチョウの頭には人間が考えている以上の叡智はあるが論理は存在していない。

全ての動植物と鉱物に紐づく自然存在による現象は人間の認識のための虚構だからだ。

虚構とは被造物としての叡智の結晶という意味だと考えていい。

自然の本体は地球には存在していないことの視点を持てるだけで考え方を広く持てる。

論理を一方向から逆方向に飛躍させることだってできる。

つまり、対象との関わりを変えることができるということだ。

私たちが現実であると認識している虚構はそれらを実現させている自然であり宇宙の本体による美しい嘘なのであるということを知るだけで私たちは変わることができる。

私の肉体に別人格が現れたあの日からしばらく経ったある日、あの時の自分に起こったことが私の肉体の一度目の「死＝覚醒」であったことをはっきりと理解した出来事があった。

それは私がある目的のためにヨーロッパに向かう船の中にいた時のことだった。

とても大きく豪華な船で、船内は黒い大理石のような壁と床で埋め尽くされていて、私たちにあてられた個室は和風テイストでデザインされ、ロビーやレストランにトレーニング

ルームまで整う異世界感が半端ない近未来空間の中で、これから約九〇日間かけて目的地に向かうのだった。

九〇日って、江戸時代の遣欧使節団かよ、とも思ったがおそらくわざわざ遠回りをして世界各国をめぐることもまたこの旅の目的の一つなのだろう。

その旅を共にするのは、日本各地から募ったあらゆる分野の天才たちで、若すぎるくらいのメンツはその天賦と自信にふさわしい天真爛漫な振る舞いを個性とし、男子も女子も屈託のない美しいイケメンと美女ばかりで、自分もその一人なのだと思うとワクワクが止まらなかった。

部屋に戻って、用意した着替えやアメニティだとか諸々をこれからの生活のために配置をしながら、この旅に選ばれたことを母さんに報告できたことがとても誇らしかったことを思い出すとこれからの自分にどんな未来が待っているのかが楽しみで仕方がなかった。

でも一つ心配だったのはヨーロッパでの言葉はどうするつもりなのかがわからんかった。

てか、ヨーロッパのどこに行こうとしてんだ？

でも、まぁたぶん天才だからどこであろうとなんであろうとどうにかなるんだろうけど、外国の人って自分たちの言語を話せない奴はゴミのように扱う傾向が強いのは知っていて、ホントに大丈夫なのかな、と思いながらその日を終えて眠った次の瞬間、船の警報のようなものが鳴り響くと俺は自分の財布を失くし、誰かを疑い仲間のバッグを漁っているのを見つかり、揉めて、干されて、海に放り出されてなお、俺はヨーロッパに行くんだと意気込みを捨てずに革命の精神を持って這い上がろうとするとかしないとかのこれから起こることなのか、なんなのかもよくわからんけどまるで予告シナリオのようでもあり、エンドロールでもあり、逆再生でもあるかのようなダイジェストを見せられると、それが「魂の最期の審判」である旨のダウンロードが行れ、死と眠りの関係が親戚にも似た同じような通信現象であることの覚醒を知った。

目が覚めると時間は朝の七時十二分だった。

俺の何かのプロとしてヨーロッパに向かう船の個室にいた。

これは夢か？と思い直してまた目を閉じると「やっぱり夢じゃなかった」と再び夢の中に入り直すと、船の警笛音もまだ鳴り止まないままでそのあまりの煩ささはイヤホンをしない喫茶店の利用者くらいあり得ない！と目を覚ますとヨーロッパ行きの件はやはり夢で、夢から目が覚めたらそれがまだ夢であることがわかる明晰さでそのファンタジックの領域が私たちの「今」であることの自覚がなぜかあって、私は自分が人間の世界である宇宙の外からやってきた人間の皮を被った人間のスパイであることのデータと一体化した。

枕元での騒音の主は携帯音だった。

眠りたい朝のワクワクするような夢の時に限って起こそうとしてくる挙動は許さん。

朝、携帯に電話をかけてくる奴だけは何人たりとも許さん。

我が神聖なる眠りという名の通信を妨げる輩は何人たりとも許さん。
静けさが求められているパブリックな場で大きな音を出す人間はアウトだ。
自分のことしか考えていないという意味で電話という行為は完全に逸脱側の考え方だ。
だから電話は逸脱存在による知性の発明ということになる。
グラハム・ベルには申し訳ないが、もはや急を迫られている時以外に電話は必要ない。
あるいは、電話でしか関わる手段が無い問い合わせ先等の場合以外は可能な限り、このご時世、携帯やパソコンのアプリを用いた文字と画像による通信方法で間に合うはずなのだ。
そうは思えない人というのは現代においてはやや配慮に欠けると言っても差し支えない。
もちろん、年齢や仕事や家庭の関係上による立場等でほとんどの場合で、様々なシチュエーションにおいて急な出来事による目まぐるしい変化の連続であることからこそ、現代社会においても電話は必要不可欠な文化と思われがちだが、それも違う。
必要なのは交信を担う通信そのものであって、電話による通話ではない、ということだ。
もしも、テクノロジーの進歩とともに私たち人間の時間の使い方と活動の仕方が変化していることを進歩と呼ぶのであれば、電話をかけるという個人的な行為においての考え方の変化等の配慮は相対的に高まっていなければならない。
電話使用による呼び鈴は言うまでもなく、電話を使用されることによる周囲の人間の耳に入るその会話の音はノイズでしかなく、その目的が何であるにせよ、自らの声が自分以外の人間にどのように認識されているかの関心は誰もが持つべきだ。
当たり前のことだが、公の場で無駄に声の大きい連中が全世界的に後を絶たず、いつまでも決して絶滅する気配がないであろうことを想像してみてほしい。
その騒々しさを阿鼻叫喚の地獄のようなモラルの欠如だと言うことができない人間がいるとするならば、そいつは自分さえ良ければそれが楽しいとする世界を自然とする地獄に適応したパーソナリティを獲得した側の逸脱人間、いわゆる同じ穴の狢が形成する集合的な意識の塊の中に飲み込まれているか、あるいはもうすでに溶け込んでしまっているくらいに多くのことを盲信していることをまず自覚することから始めなければならない。
会話をやめろとは言っていない。
電話をなくせとも言っていない。
電話事業の恩恵や温床等があるから法律を変えろとも言わないが、電話をかけるという行為自体が相手の時間を奪う行為なのだということを理解しろと言っているのだ。
私は寛容だから電話通話の排除をライフスタイルにしろとまでは要求していない。
要求するという行為は魂の階層の中でも最も下劣で穢れた程度の低いことであることを鑑みても、呼び鈴によってそれに応じるよう要求、要請、命令にも似た現象を引き起こしている電話という機能が私たち人間の魂をどれだけ貶めているのかも知っておいた方が良い。
昔から存在しているから正しいという考え方もやめろ。
みんなやってることだからという発想も捨てろ。
どちらかというと、文明人は昔からずっと間違い続けている点についてを考えるべきだ。

アインシュタインも相対性理論を見出した時の切掛は「公理を疑った時だ」と語っている。
光速度絶対法則も重力レンズ効果も量子力学もブラックホールも彼の提唱した理論はすべて、まだそこにはない、どこかから引き出された概念として空間の秩序と生物の生命の営みの背後にあり続けている叡智に寄った知性についてであることをもっと知るべきだ。
同時に、そのアインシュタインの知性でさえも不完全であると言えなければならない。
そういった類のことが本当の意味で「みんな」という概念を超えるということだ。
未知に対して真摯な科学者や既存の創造性を越えるべく絶えず挑んでいる芸術家やスポーツ選手といった、あらゆる道の真髄を極めようと試みたことで語られる哲学の多くは個というギフトによる恩寵だ。
恩寵への感謝と洞察への到達が人間真理への道の入り口となる。
私たちは恩寵という与えられたものによって存在できている。
そういった事実に関心を払うことのできなかった人間は全部自分という自意識で完成されていると信じている自己責任マシンであるわけだから可哀想という他ないわけだが、もしも私の目の前で何らかの疑問と真理を知ろうとする手が差し出されたのであれば、私は叡智による手を差し伸べないわけにはいかないだろう。
逆に言えば、差し出されていない手は取る必要がない。
なぜなら求められていないからだ。
つまり、手の使い方には二種類あるということになる。
自分から誰かに勝手に干渉するお節介な手と誰かの助けに応じる救済の手とだ。
基本的に個はお節介を嫌い、自分からすることに楽しみを感じるようにできている。
自分で求めて、自分でやるから楽しいのであって、求めてもいないことに応じなければならないということには須く義務という強制力が働くことによって、個は個であることを忘れて「みんなやっているから」の中にある安寧に妥協する道を採用していくこととなる。
私たちがなぜ個的な人間という活動をしているかの本質はその一点にある。
個という「私は」の概念は現代の人間に普遍的に搭載されている特別な権能だ。
当たり前の現象ではない。
現代に生きる人間という種にのみ向けられた恩寵なのだ。
ゆえに、誰もがそれぞれの個に応じた天才的なギフトを用意されて出現している。
残念ながら、それがわからなかった人間が誰かの邪魔をしたり、自分の狭い裁量で自他ともにあるはずの天賦を無視し、取るに足らないとした自らの浅ましさとやましさの罪悪感に取り憑かれ、その顛末によって子供の成長を間違える。
信じる対象を自らの教育の段階で履き違えるのだ。
どのように間違えているのかはレバノンの詩人カーリル・ギブランが教えてくれる。

あなたの子供は、あなたの子供ではない、生命の渇望の息子であり、娘である。
あなたを通してくるが、あなたからくるのではない。

あなたと共にいるが、あなたのものではない。
あなたは弓である。
そして、あなたの子供は生きた矢としてあなた手から放たれる。
射手の手の中で、あなたは喜びのために曲げなければならない。
なぜなら射手は飛んでいく矢を愛するのと同じように
しっかり弓も愛しているから。

カーリル・ギブランの『預言者』は彼が一五歳の時に着想された叙事詩だ。
二〇世紀のアメリカで聖書の次に読まれたと言われるほどの名著で、近年では映画にもなったことで彼に預けられた神の言葉は現代では広く受け止められているが残念ながらその理解に基づいた教育の仕組みは存在しない。
人間は母親が産み、精神は親の教育の責任であり、子供は未来の労働力なのである。
見た目通りの事実に基づいて人間の認識を間違えているのだ。
自らの認識を間違えた世界と親を神として信じた子供も自らが何であるかを間違える。
逸脱の再生産による連鎖反応の系譜が人類なのだ。
有史以来の人類は常に変わることなく転倒し続けている。
私たちは「今の連続」の中にしかいないのだが天体時計と切り離すことができない。
人間の内に止まった時間である無限の領域があるとは天地がひっくり返っても認めない。
過去は今日の記憶であることは明らかなのだが、それは存在していることとなっている。
もうすでに存在していない過去に紐付けて有史以来先祖の呪いを現実と信じ続けている。
未来は今日の夢に過ぎないのだが、人間は明日も変わらず今のままであると信じている。
だから今ある心配や不安が同じように変わらず明日も存在しているだろうと思い込む。
人類は何億年前という単位で宇宙の時間や地球の年齢を炭素等の状態で想定しているが、その間というより全空間の原子がエントロピー増大の法則に基づいて一定の秩序ではあり続けていないのに、一律の「時間」とやらが一度の変転もなく、なんの歪みもなく現在の太陽を基準とした時計の針と同等のリズムを運んできたとでも思っているのだろうか？
少なくとも「時間」が高重力と位置及び熱の影響を受けることを自らの知恵に転換できている人は私たちが「時間」と呼んでいる本質がある種のエネルギーであるということを理解した上で「時間」及び「人生」との関わり方を選んでいることだろう、知らんけど。

大まかに言って時間には二種類ある。
一つが、私たちが世界中で共有している一日を二四時間とした天体時計による時間だ。
もう一つが、私たちの内側に有している自分自身の過去を記憶として灯している時間だ。
この二種類の時間軸が同居している奇妙な世界観をわかりやすく言うと、この世界の変化を促している時間の流動は私たち人間の認識による感覚がそう見せているのだ、という

とても安っぽくてチープでありきたりな擬似科学的なインチキみたいな説明となり、かなり恥ずかしいのでその旨をわかりにくい熱力学第二法則を軸とした時間の不可逆性問題と物理学が示す時間反転対称性を通じて「時間には二つの側面がある」ことを裏付けとした現代科学的な説明は余裕なのだが、それをするとオカルトを耳にした時の証明絶対主義者たちの偏見によるアレルギーが多くの一般人に生じることをもうすでによく把握しているため、対象の理解が難しく遠くなるであろう話はできる避けるよう心掛けてはみるが残念ながら真理のためには容赦できない。

その上で想像してみてほしい。

一定量のミルクが真っ黒なコーヒーの中に落ちたとしよう。

それを観察する私たちはミルクとコーヒーが混ざり合いの進行を確認することができる。

時間の進行と共にミルクとコーヒーが乱雑さを増しながら複雑に関係している。

その進行の様子が私たちには時間の矢のように見えることから時間の方向が理解できる。

熱力学的に言うと決して時間は過去には戻れないことから不可逆性問題としている。

次に時間が逆向きになっても問題のない現象についてのイメージをしてもらう。

今度は別の想像力を働かせてほしい。

完全な真空状態の空中で無地の球体が一つだけで振り子のように動いていたとしよう。

それを観察する私たちにはその球体の時間がどちらに進行しているのかがわからない。

どういうことかというと、観察している対象の振り子が馴染みのある時間の方向に動いているのか、その現象が実は逆再生されたものなのかが観察者にはわからないはずなのだ。

もう少し理論的に言うと、単一の対象物があまりに対称性を保った動きをされると私たちの認識はどちらの向きが私たちに馴染みのある時間の方向なのか、実際は逆再生された投影物なのかもしれないことの区別がつかなくなる。

つまり、比較対象のない条件下では時間の方向であり感覚は問題ではなくなるのだ。

要は何もない無重力の宇宙空間にいる自分だけが放り出されている状況のことだ。

それをどこかで観察している人がいたとしたら、あなたの動きが本当に時間通りに再生されているものなのか、逆再生に編集されたものなのかがわからない、といった状況だ。

無論、あなたが比較対象の存在しない空間にいるならば、あなたも時間がわからない。

まとめると物事のバラバラが認識できれば変化による時間を確認できる。

だけど、対象が一つにまとまり整いすぎていると変化が無いため時間が確認できない。

もっとシンプルにすると、多様性に富んだマクロの領域である私たちの宇宙では時間が存在していることが確認できる、そして物質の最小単位である単一の粒子の個体及び原子や素粒子の単体のみを扱うミクロの領域にフォーカスすると時間の流れが問題ではなくなることから私たち人間には時間の方向性が有るのか無いのかすらわからなくなる。

時間がわからない、というのは「今」があることしかわからない、という意味だ。

時間がわかる、というのは過去から未来への変化が確認できる、という意味だ。

時間は物と対象があるから存在するのだ。

時間は意識、光、素粒子のように対象として流れを観測できない領域では問題にならない。
結論すると、時間は天体を回す熱エネルギーに彩られる多様な物質側の変化の連続。
一方の結論は、その流れを「今」という連続の立場による感じの連続的観察。
二つの相対性が同居する世界で私たちが物質側の変化を時間として感じている、となる。
これが天体に基づいた時間と私たちの感覚に基づいた二種類の時間の正体だ。
時間には二種類あるとはそういうことだ。

天体＝肉体
過去＝今今
現在＝今今
未来＝今今
時間＝記憶

私たちの対象を識別することのできる個の権能が時間をしているとも言える。
もし金星とか木星の他惑星で暮らしてたら、時間が地球とは違うのは明らかだろう？
そういった何の記憶なのかを分析できるのかも個という自己認識による識別のおかげだ。
自分と他人、右と左、美人とブサイク、「今」を基準に知識を区別する感覚が時間なのだ。
だから私たちは時間以上に「今」についてをもっとよく考えなければならない。
時間もよく考えてみると奇妙な実態をしているものだが「今」はもっとミステリアスだ。
私たちの五感は対象をそれぞれの感覚で認識できているが「時間」だけはできない。
しかし、「時間」とは実体はないけど実感はあるという私たち人間にとって確かな感覚だ。
それを教えてくるのが天体だ。
天体の提供する環境の歳月が私たちの始まりから終わりを緩やかに知らせてくれる。
だが天体を運営している宇宙は「今」という瞬間であり、意味であり、価値やその存在概念の考え方もその答えは無限にも等しいバリエーションを提供するだけで、時空間やエネルギーの法則のように絶対的な定義を以ては教えてくれない。
なぜなら、「今」という私たちの真理の答えは自分で決めて辿り着かなければないからだ。
今何をしているのか、今何をしようとしているのか、今がなぜあるのかの「今」に至るまでの主体はすべてあなたの見てきた環境に促されながらあなた自身が選んできた「今」がどのように「今」を考えているかのあなたの「今」への姿勢が時間となって現れている。
その意味をあなたは奪われてはいないだろうか？
その意味をあなたは放棄してはいないだろうか？
その意味をあなたは憎んだり、蔑んだり、許せなかったりしてはいないだろうか？
あなたの「今」が二四時間による基準に左右されてはいないだろうか？
時間は有限、時は金なり、年齢でエネルギーが減る、歳を取ったら誰でも衰える、時が来たら死んで終わりなどという「今」を誰かの決めたルールの枠に委ねてはいないだろうか？

それらはすべて正しい。
それらはすべて尊重されなければならない。
それらはすべて自由でなければならない。
それらはすべて美しくなくても構わない。
それはすべて間違っていても構わない。
それらはすべて存在していて良いものなのだ。
なぜなら私たちの目の前に展開されている現象の全ては私たちの望んだ「今」だから。
そして最後にその「今」の全てを捨てる覚悟の意味に辿り着ければ究極的に問題はない。

つまり、私たちの「今」がどんな価値であったのかを教えてくれるのが「死」だ。

死までの間に誰かを尊重したり、尊敬できることはとても美しいことだが、誰かや誰かが作り出した何かへの崇拝を重んじすぎて、自分を失ってはならないということだ。
スナフキンもそう言っていた。
そして、自分のための本質的な情報は知識ではないことから、どこにも落ちていない。
だから自分の道を歩かなければならない、その感覚を信じた何かがなんであるのかを知らなければならない、そこで得た考え方こそが自分なのだと邂逅しなければならない。
ていうか、「自分」という概念は常にあっても構わないが、「私」はこの世界には存在すらしていないとしなければ、この世界には正解がない、ということを知ることだけが正解なんだということの意味はわからない。
「自分」は『私』によって想起されているに過ぎない。
だから知らないことがあることすら本当は気にしなくていい。
花や動物や鉱石が自分の在り方を知らないからその存在を否定されたりしないだろう？
ゆえにテクノロジーの核でもある相対性理論を知らないから下等だということはない。
知識や能力による人間の持っているとされるものに優劣など断じてあり得ないのだ。
記憶力が特別だとか、運動や芸術、科学や宗教といった特定の分野及び組織の中で天才性を発揮しているとか、役に立っているとか、とてつもない数の人間に信頼されているかとかさえもどうでもいいことなのだ。
お金の有無等による格差などもってのほかだ。
肉体が生きる上で便利なわりに、肉体が死ぬ際も、死んだ後にも何の役にも立たない。
お金の圧倒的な価値と存在感は何にでも替えることのできるその匿名性にある。
そもそも誰のものでもないのだから、どんな形、どんな流れであっても、必要なだけ手元にあればそれで良いはずなのに、必要以上に求めすぎなのだ。
不安があるのはある種仕方がないし、結構なことでもあるのだが、そのお金は究極のところの不安である死に際には何の助けにならないことをどこかでよく考えた方が良い。
不安があることとお金がないことを結びつける考え方を改めた方が良いという意味だ。

自分のお金などという概念はあり得ないのに、多くの人が目の色を変えて、お金を目的化した自意識で、お金の保有による安心と優越に意識的にも無意識的にも依存している。
その精神が真の意味でお金という拠り所を失う肉体の死後にどんな姿をしているのかを簡単に提供するなら、権威による歴史の強制力に自尊心が飲み込まれていたことによる虚像に塗れた自分自身と出会うだろうことを約束しよう。
そして、物質とその信用を自分と勘違いした自尊心は獣のような怪物だ。
気をつけた方が良い。
誰もが好奇心と物質欲に焚き付けられた「自分」という怪物を意識の中に飼っている。
また人間世界はその怪物たちが吐き出した知性によってできているとも付け足しておく。
つまり、人間は自分が何をしているのかを知らないことをテーマにしているとも言える。

「父よ、彼らをお赦しください。彼らは何をしているのか自分でわからないのです」

十字架にかけられたイエスがユダヤ人指導者とローマ兵たちに向けた祈りの言葉だ。
実際には過去と未来、地球紀の人類すべてへの恩寵となっている。
人は周りに応じた気分のままに人を殺せるし、自分や誰かを蔑ろにすることもできる。
古代人と現代人とでは同じ人間と見做してはならないのだが、ギリシアやローマ時代の人間は古代人というより、現代人の意識と同様に何も見えないし知らないというテーマのはしりゆえに、ソクラテスやイエスのようなユダヤの神に反するような活動を扇動する人間は殺しても良いという品性による律法が時代を支配していた。
人間が天を忘れてしまった紀元前からの時代のことを私たちは有史と呼んでいる。
私たちの個はそういった同調圧力的な影響を少しずつ克服してきた歴史の末端にいる。
だから引き続きみんなと同じ、何もわからないままの人、になってはいけないのだ。
原始時代の人間に、火が何であるかを知らなくても扱えたように、現代でも量子力学や重力及び宇宙、地球、人間の遺伝子構造等が何に、どのように、なぜ、齎されているかの本当のところはまるでわかっていなくても、携帯を作れたり、宇宙空間に飛び出せたり、遺伝子や量子を扱うことができる。
今現在とは、わかっているから在るのではないのだ。
わからないまま多くのことがなぜか存在している、と考えるべきなのだ。
なぜか？
人間が既存の人間規範を克服し、地上の人間であることを乗り越えていくためである。
そもそも現在の知性は人間がなぜ死ぬのかもわかっていないのだ。
心不全や幼児突然死症候群等を考えてみると良いと思う。
パソコンがある日突然動かなくなるように、人間もまたその一生をある日突然終える。
死期は誰にもわからない。
でも、医師の多くは余命を宣告する。

でも、余命よりも遥かに長く生きる人がいる。
そして、確率や統計を信じるに値するとした人が権威ある医師の余命通り死ぬのだ。
そういう治療を受けていた以上に、そういう考え方が自分であるという信念が疑うことなく骨の髄まで浸透していたからだ。
ブアメードの水滴実験というのがある。
オランダの医師はある死刑囚に釈放を条件にした出血致死量を調べる実験を提案した。
死刑囚であるブアメードは了承し、目隠し、手足の拘束、足首にメスを入れられ経過観察。
医師たちはブアメードに聞こえるよう失われた血液やどれくらいで死ぬのかを語り合う。
そして、致死量だ、という宣告した頃には死んでいたのだが、実際は浅くメスを入れただけで滴っていたのは血液ではなく、水滴の音だった。
つまり、思い込みで人は死ぬのだ。
冷凍庫に閉じ込められた人も同様だ。
一晩たってその人は冷凍庫で死んでいるのを発見されるわけだが、実際は冷凍庫の電源は入っていなかったため、死因は凍死ではなく思い込みだった。
身体は生きることが可能なはずなのに生きるのをやめたということでもある。
身体はどこも悪くないのに死を受けれた自分になることが人間には可能だということだ。
逆に私の別人格出現から現在までの「私」の生存状態というのは私が死ぬことを選択しなかったことによる「今」の継続であるというのだ。
どうやら死期とはそういうものらしい。

私たちが自尊心と呼んでいる「自分」の主体とは肉体ではないのだ。

では肉体の主体が何かというと地球だ。
肉体は基本物質であり、肉体そのものが生きているのではなく、生命体によって肉体が生きているように見えるだけで、人間も動物も植物も生命体が不在の状態になるとミイラとなり、地球と一体となるべく鉱物と同じように硬化し、骨はやがて塵へと風化することで、物質の循環に還るという崩壊へと向かう諸力が肉体及び物質の役割の本質にあたる。
人間の肉体の血液や骨、臍の緒はかつて地球の子として結びついていた頃の名残であり、地球原初の人間存在は地球から生まれたことを『聖書』では、人類の祖であるアダムのことを「地の子」と呼んだ。
人間の神経組織もまた同様で地球に内包されていた叡智が血液として空間を漂う中で神経は空気的な要素をして存在し、血液として大気中に滞在しながら地上を観察していた人間存在の本質を気体から液体、液体から鉱物へと空気中の神経を経て硬質化を促すことで血液による知覚状態を空間の外部から皮膚の内部へと包み込む転換的な進化に干渉した。
やがて血液が皮膚から骨へと物質化していく過程で、神経存在は人間の知覚であった血液の投影を脳が担うようになることによって、人類は地球から分離し、人間は神々と一体で

あった雌雄同体状態から男女の性別の発生に伴い、人間は人間から生まれる仕様が運命となると同時に血液ではなく、脳で作り上げられた空間を知覚し、思考するようになっていく。
血液とはもともと霊的な領域とつながり、その認識を視覚とするためのものだった。
だがしかし、脳組織からの神経組織を生命以外の諸力に奪われることで分離した。
以来、人間は神経で思考しながら活動することでその終わりのことを「死」とするようになり、その諸力の根源である地球の重力から自由になるべく直立歩行を人体に指示し、脳は頭蓋の脳液内にベルヌーイの定理による浮力を創造し「死」についてを考えない構造を実現することでパラダイスのような地上での永遠を夢見るようになる。
逆に動物は血液で空間である地球と結びついていることから水平状態を姿勢とし重力と斥力との均衡を生命状態とすることで、かつて自我を持つことを選ばなかった人間の退化存在として進化した地球の人間をそれぞれの星座から観察している。
だから動物の肉体は生きてもなければ元々死んでさえいない、ということになる。
ただ、すべての物質は劣化し、風化し、崩壊し、消滅するようにできている。
またこの崩壊の力はエントロピーの増大を引き起こしている斥力的な方向性のことだ。
つまり、物質における宇宙は必ず崩壊するということだ。

では肉体を生きた状態にしてきた生命体の主体が何かというと宇宙そのもののことだ。
宇宙そのものが一つの生命体であり、無数の銀河や恒星や惑星はすべてある生命体の一部として宇宙の構成員の役割を担っている。
その宇宙の一部を切り取った領域のことを太陽系と呼び、地球は人間という生命体を通じて宇宙を観察することを目的とした設計図を記憶に書き換えて構造を持続させている。
生命体の本質とは基本記憶であり、記憶とは一瞬前の状態を維持し、秩序を保とうとする。
私たちの身体で言えば、遺伝子によって担われている自律的な新陳代謝現象のことだ。
新陳代謝とは、ホメオスタシスと呼ばれる状態維持機構によって保持されているわけだが、これは一瞬前の状態を常に保持する記憶の力である生命体の肉体現象のことだ。
私たちが口に入れたものを口から胃への過程で液体とすることでその栄養分を勝手に各細胞と臓器にふさわしい状態に変容させ、それを血液に乗せて必要な分だけ人体の組成に取り入れては不必要なものは外へと排出する秩序構造維持のための全ての出し入れを担っているのが恒常性を担う記憶に基づいた新陳代謝を可能にするのが生命体の役割にあたる。
これを宇宙で言うと、引力及び重力といった中心に集まろうとする方向性の力のことだ。
実際は重力という単独で独立したエネルギーではない。
天体の持つ生命力と物質の持つ崩壊の均衡が天体という秩序を生じさせているのだ。
その歪みによって空間に撓みを生じさせることで、各生命体のための秩序に必要な位置構造等を可能とし、銀河の中心を軸に歳差運動の周期記憶の観察を地球に再生させている。
この記憶の再生状態によるある存在の進化の進行方向のことを位相という。
この地球に向いている引力の位相が私たちに宇宙人が認識できない構造となっている。

宇宙の全てが生命に満ちている以上、全ての惑星に元素を担う生命が存在し、その環境に相応しく適応した位相を再生させている生命体が活動している。

宇宙人と出会えない仮説ではフェルミのパラドックスが有名だが、宇宙には位相が存在し、それが各惑星ごとに認識のフィルターが違うことから互いに死の星として認識しあっている、そのため物質による認識と技術では見ることはおろか通信もできない、それは私たちが自分以外の誰かの記憶や認識及び感覚を知ることができないことわりと同じだ。

私たちは地球という位相のある定められた宇宙の記憶の再生を生命体に与えられている。

だから肉体が生命体を保持できなくなると地球での再生状態は終焉し崩壊に向かう。

またこの生命体の本質的な記憶の力とは、宇宙全体の細胞による繰り返し状態のことであり、地球も人間もマクロ宇宙がミクロに姿を変えた同質の存在であることから、記憶は細胞全体に散在し、ロシア人形のマトリョーシカのように階層構造であるということになる。

つまり、人間及び自分を知りたければ宇宙を観察すれば記憶を取り出せるということだ。

では私たちが生きていると勘違いしている精神体の主体が何かというと恒星だ。

恒星とは星空に瞬いている銀河の構成体であり未来の太陽の卵のことだ。

一般には太陽系から何光年か先の大質量の太陽とされているが、実際は我々のことだ。

全てが幻想である光の投影主が太陽であるとしたら恒星はその偽りの世界におけるさらなる追放者のような役割を夜空の背景として担いながら太陽の世界の細胞と繋がっている。

私たち自尊心は宇宙という「生命体の一部に寄生する」精神体のことだ。

植物に寄生する生物のことを想像してほしい。

ある植物の葉にある昆虫が卵を産みつけることで形成されるコブのことを虫こぶと呼ぶのだが、そのコブは本来の植物のものではない。

寄生した昆虫の卵が植物の生命力に働きかけることで植物の葉はあるべき色や形等を変形させられながら昆虫と共存している。

人間を含む動物に宿っている精神体と地球の生命体との関係のことがこれだ。

また人間の肉体と人間の生命体との関係も同様と言える。

私たち精神体は人間という種の肉体が有する生命体に寄生している存在なのである。

つまり、精神体はそれ自身では物質の世界に存在することができず、生命体の活動を前提とすることでその器から栄養を補給し、その栄養である生命エネルギーを消費することによって、精神体は肉体での生存を意識できる存在として活動ができる。

さらに、私たちの精神体はある程度まで生命体を制御することもできる。

生命体の記憶に基づいている代謝や血液の循環に神経組織を通じて干渉できるのだ。

その機能が好奇心を起点とした欲望や情動による感情のことだ。

この感情が提供してくる快と不快の温度差の感覚を底辺とし私たち精神体は生命力をエネルギーに循環器系を回し、人体内の様々な要素をひとまとめにした状態を意識として神経に出力することを感覚とし、果ては天体の自転までを促す精神体の本質は回転にあたる。

精神体はこの回転の作用を司って生命体の対象を運動させることができる。
神経によって生命体に無理をさせることで肉体を濫用することができる。
神経によって無理をした生命体は精神を戒めるために肉体を病気にできる。
神経によって病気になった肉体は衰えることで生命体を枯渇させられる。
神経によって枯渇した生命体は肉体から出ていくことができる。
神経によって生命体を失った肉体は精神体に「死」を教えることができる。
精神体である私たちはそういった構造の全てを忘れて肉体のことを自分と呼んでいる。
ゆえに精神体の本質が回転による運動であることがよくわかったはずだ。
また同時にその回転は自分が精神体であることを忘却してもいる。
私たちが文字通り本質的なことの全てを忘れて肉体そのものが自分であり、人間性が全て肉体由来であることを完璧に疑わないことで、必要以上に隣人と社会が誤謬で混乱しているにも関わらず平気で間違ったことを受け入れられているのは忘却の恩恵なのだ。
人間として生まれたばかりの頃のことや自分がどこからきたのか、三年前に何を食べたかはおろか、昨日会った人と話したり聞いたりしたことだって平気で忘れることから都合の悪いことは大体なかったことにしたがるのもそういう仕様によるものなのだ。
記憶することの難しさから私たちは外部ツールに情報を保存する術を技術とした。
自分を「物」として地上に永遠に残そうとする意思を想起させている存在がいる。
そうなるように導いているのが脳だ。
脳は都合の悪いことを忘却するためのフィルターなのである。
だから脳は自然と他人から身を守るために対象の破壊を厭わない。
脳は自分が正当化されるためであるならば「無罪の錯覚」を行うことから、人はみんな自分が属している社会が何をしていようが自分個人とは関係ないし、自分だけは他とは無関係で善良であると信じ、考え、自惚れていることを脳が都合よく整理してくれている。
また都合の良いものだけを目に投影することのできる観測選択効果が仕様となっている。
バイアスのことだ。
人間的な脳の都合による偏りが私たち精神体に見るべきものを傾向づけているのだ。
美女に目を奪われてその背景がどうでもよくて目に入らないだとか、同じサイズであり同じ色のものを違うように見てしまう錯視があったり、霊的な存在を見ることができなかったり、なぜ存在が存在するのかなど、とても大事なことを大半の人が真剣には考えないし、いろんなことの肝心と核心がよくわかっていなくても大丈夫なのは忘却フィルターによるバイアスという観測選択効果を持つ脳のおかげなのだ。
あと目は脳だ。
目が認識した物を私たちは見ている、と多くの人は思っているかもしれない。
でも実際は目に映った対象を脳で処理されたものを、私たちは見た、と認識している。
私たちは脳を見ているのだ。
目とは外部を認識するために進化の過程で頭蓋からせり出た脳の一部、カメラにあたる。

その目に映る認識には脳の仕様である都合の良いものだけが見える世界観が展開される。
それが物質感覚であり、私たちは物質の質量が重力として時間と天体を回すエネルギーが支配する宇宙と地球と生物のいる空間で感覚している人間を観察している立場なのだ。
わかりやすく言うと私たち精神体は脳によって作られた世界に感覚として参加している。
もっとわかりやすく言うと、私たちが太陽から光を受け取っているように見えるし、感じるし、確信的に思うのは脳が人体内の光を目の網膜で脳の方を向いた光受容体組織で心臓から人体細胞の全てから力を生命の光として受け取っていることの投影であり反映なのだ。
繰り返そう、網膜内の光受容体組織は目の外ではなく脳の方を向いているのだ。
目の裏側では脳の方を向いた光受容体細胞による臓器及び下半身からの細胞の光を受け取っている、と言っている。
わかりにくく言うと、光受容体組織が受け取っている脳からの投影とは、全ての臓器と細胞からの情報の収束であり、それが脳によって、脳の都合による、脳が見せたい世界観として自然の風景であり、人間の社会であり、夜空に浮かぶ惑星であり、恒星であり、銀河の向こうの果てまでが無限なのではないかという宇宙の映像を私たち精神体は見せられている。
脳はこういった根本的な構造のことを忘却させている。
私たち精神体の本体が恒星にあることの記憶を脳は消し去っている、ということだ。

つまり、私たちの精神体は人間の物質体である肉体の脳によって洗脳されているのだ。

私たち精神体の主体は恒星である。
しかし同時に私たちの精神体をあらぬ方向へと認識を向けさせている脳にもまた主体が存在している、それが月だ。
月は一般的に地球を周回する双子のような衛星として有名だ。
月の起源は地球惑星の生成の過程の他惑星の衝突によって生まれた地球と衝突惑星の残骸が惑星化した物であるとするジャイアントインパクト説が広く知られている。
なぜなら月の年齢や材質が地球のそれと多く一致することからのようだ。
つまり、地球と月はサイズも形も違えどペアであり、古い兄弟であり、双子なのだ。
他にも様々な起源が考察されてはいるが、月に限らず人間の脳による知性が起源を見出せた対象は実は何一つとして存在していない。
人間は宇宙や地球の物質、人間の始まりだけでなく、ありとあらゆる動植物の起源を見た者も、知る者も誰一人としていないのだ。
人間の考察はすべて仮説であり、その仮説を無理矢理本当のことにし、現実と呼んでいる。
その仮説の排出が構築する集合的な世界観によって宇宙が顕現しているのだから当然だ。
宇宙は私たちの見たい宇宙を都合良く観測してきた歴史があるだろう？
現在もその観測精度を更新することに夢とロマンの好奇心で現実を作り替えている。
実はこうでした、本当はこうでした、今はこうですの更新の連続を観察する私たちは顕微

鏡と望遠鏡がより詳細を明らかにするたびに事実を改めているのだから・・・

その都合を促しているのは人間の脳であり、その主体の根源に関わる諸力が私たちの精神体に影響を及ぼしていることを私たちはまず知る必要がある。

最初に理解するべきなのは、脳は私たちが思うような仕事をしていない、ということだ。

運動準備電位という私たち人間に自由意志が存在しないことを示した実験を紹介する。

ベンジャミン・リベット博士が一九七〇年台に発見して以来現在に至るまで反証に耐えている運動準備電位とは、私たちが意志を持って肉体を動かすよりも〇．三五秒以上早く脳が肉体を動かすための脳波を受け取っていることを証明した歴史的論文のことだ。

私たちの意思よりも前に脳が勝手にある情報を受け取って、もうすでに肉体を動かす準備をしてから私たちは「自分で身体を動かした」と思わされていることがわかっている。

この実験は私たちが私たちの信じているような自由意志が私たちには無いことを証明したとして、現在までも物議を醸し続けているが、この実験論文が記す私たちの意識が実は「観察を行っているだけ」で脳と身体が自動で行なっていることに受動的であることの構造は現在のＡＩテクノロジー及びロボット工学の半導体内で活用され続けている。

この実験が示す真理は私たち意識と精神が脳と肉体から切り離されいる、ということだ。

また意志よりも〇．三五秒以上も前に流れてくる脳波は下半身からの運動準備の電位だ。

私たちの肉体を駆け巡っている神経回路は電位差に基づいて作用していることから、肉体の下半身が必要とするエネルギーが発生する際は電位が上位となる。

だから運動準備電位の順番は下半身から脳、脳から私たちの意志、ということとなる。

つまり、身体が勝手に動いているのを脳が受信し、私たちはそれを自分の意志だと勘違いすることで、脳によって変換された受信情報を真実とし人間的な考察を行なっているのだ。

繰り返すがこの人間的考察を行なって生命的な活動をしているのが私たち精神体の諸力で、これにあるまじき方向性で物質宇宙という認識を通じた偏見的なバイアスを提供しているのが脳であることの二元構造で、私たち精神体と物質的肉体を司っている脳機能とが同時に重なっていることを量子脳理論は説明している。

量子脳理論とは、二〇二〇年にノーベル物理学賞を表彰されたロジャー・ペンローズ博士とアリゾナ大の麻酔医師であるスチュアート・スメロフ氏が提唱し「脳で生まれている意識は、素粒子よりも小さな領域で、重力にも空間にも時間にもとらわれない性質で、意識下では脳に留まり、眠りや心臓停止時には宇宙に拡散したりしている」ことを『皇帝の新しい心』という著者の中で記述している。

私たちが脳で認識している世界は全て物質で構造化されている。

その物質は分子、原子、電子が化学反応的に組み合わさることで存在しているわけだが、私たち人間の脳は物質と物質を結びつけている電子も物質の核である原子も分子も素粒子もミクロの領域の全てを見ることができない。

現代の量子力学が観測しているのはミクロの領域の変化がもたらす結果だけなのだ。
そのミクロの変化の詳細を明らかにしようとしている分野のことを量子力学という。
物質の土台はすべてこの量子である原子、分子、電子の結びつきによって決まっている。
しかし、量子力学で問題となっているのが量子の二重性と呼ばれる現象だ。
私たちが物質として認識しているのは粒子状態のことなのだが、私たちが観測していない状態の物質の量子は波の振る舞いをしていることが二重スリット実験によって確定した。
つまり、私たちの認識している物質世界は粒であり波という二重で良いこととなった。
それがヴェルナー・ハイゼンベルク博士によって提案された不確定性原理だ。
なぜミクロの領域だと空間の制約を受けないのかはわからないけど、量子というのは不確定な振る舞いをするものとして解釈していこうってことがコペンハーゲンで決まった。
どうやら量子は素粒子から全て基本的にペアであることによって存在しているらしい。
そのペアの一方が右であるとすると同時にもう一方のペアは左であることが確定する。
これは光速を超えた関係性で空間的な距離も無視して影響し合うことがわかっている。
また、全ての物質は波の性質を有していることから空間の壁をすり抜けることが条件によっては可能であることがわかっていて、私たち精神体と肉体である脳は量子的な性質で繋がっているということだ。
これを具体的に言うと、私たち精神体は恒星として人体の下半身の生命エネルギーとして結びつくことで虫こぶのように肉体の様々な組織を一つにまとめて再生運動の記憶を意識として心臓から脳へと循環させ肉体を運動可能な状態にし、その恒星から送られてくる人体循環の生命情報を地球の人間の欲望状態に相応しく食べやすく都合良く加工する作業を月の軌道を通じて行うことで欲望の起源である月から眺めた地球の感覚的な記憶を脳であり目から量子的変換及び量子の二重性を伴った状態の物質宇宙を投影している、となる。

月とはかつて地球と共にあった。

そして今も地球と共にある。
地球の衛星としての月はかつて地球と共にあった月の成れ果て、残骸、つまり名残だ。
私たちの脳に投影されている月は前宇宙紀における地球の成れの果てでもある。
私たち精神体の意識はこの月と地球の軌道内領域に展開されている重力に囚われている。
いわゆる地球質量による重力というのは地球の生命力のことであり、地球の生命力の本質とは地球内部に存在している月の諸力のことにあたる。
かつての月のことだ。
かつての月が地球の内部で生命体をしているというのは重力の反映として現れていて、その中心へと向かう秩序である重力の根源の上で私たち精神体は肉体活動が可能なエネルギーを獲得していて、その恩恵は地球進化におけるかつての月の残響であるという意味だ。
潮の満ち引きが良い例だ。

天体を回すエネルギーと磁石にも及ばない弱い重力との格差もこれだ。
『エントロピック重力理論』というものがある。
この重力エネルギーの矛盾についてを解消したエリック・ヴァーリンデ博士の理論で、重力とは何かの活動の結果に起きた現象で重力という単独の現象及びエネルギーを持つものではない、という研究結果の論文がある。
裏付けはアインシュタインの重力レンズ効果の矛盾点を解消している点だ。
重力が空間の歪みであるとした理論には大きすぎる重力範囲とエネルギーの矛盾をダークマターという観測はできないけど質量だけはある、とした仮説上及び架空にも近い存在を計算式に取り入れて観測結果との辻褄を合わせていた。
しかし、エントロピック重力理論が示す、ダークマターを用いずにエントロピーによる質量によって変化する熱エネルギーを考慮した計算式で観測数値と合わせるとアインシュタイの相対性理論による予測と一致した、というものだ。
要は重力とはエントロピーを阻害しているエネルギーである、ということだ。
エントロピーとは物質の無秩序への方向性の働きのことで斥力のことで崩壊の力だ。
一方で、重力とは斥力とは逆方向の働きであり秩序を決定している力のことである。
つまり、重力とは生命力と熱エネルギーとの均衡によって決まっている、ということだ。
そのことを現在では地球内部に本質を移したかつての月による生命エネルギーの反映であるということを誰も知らない。
地球の生命力とは地球内部で活動しているかつての月の力が重力となって現れたものだ。
かつての月とは現在の地球以前の進化段階でのことで、その状態はまだ鉱物という物質形態は出現しておらず、光と空気を由来とする液体の元となった原初の植物が天体の底辺を形成し、その環境エネルギーを糧とした動物の祖先にあたる精神体たちが存在していた。
私たちの精神体のことである。
かつての月における私たちは精神体を活動体とする生命的進化段階を使命としていた。
つまり現在の地球の動物と同じような精神活動を行うことで、進化の段階で初めて運動という概念を活動力を獲得し、その方向性の力のことを好奇心、感情、快不快といった現在でいう神経活動のことで、私たちの祖先である原初の精神体はその衝動のままに月の軌道を天体とする世界を漂いながらその経験の様々なバリエーションの創造を行なっていた。
その精神体たちに自我はまだ宿ることはなく、「私たち」と呼んできた主体はかつての月の段階では精神体そのものである獰猛な動物たちをその宇宙の裏側、外側、反対側とでも呼ぶべき虚数的な領域から自分の手の指や顔の表情、各種筋肉を動かすような感覚でかつての月を彷徨う精神体としての動物の活動を観察的に司っていた。
よって「死」という概念は全く存在せず自由な衝動の機会を与った立場に私たちはいた。
そして、かつての月における人間存在たち（私たち精神体のことではない）はそんな自由過ぎる私たち動物体の精神を導くように、ある意味教師や師匠のような立場で共存的な活動をしていた。

そんな月の住人としての人間存在とは動物体として本能的衝動のままに振る舞う月の私たちの精神体状態とは違い、原初の水の流れる天体内を「私は」という固有の自我を有しながら、光と空気を操り植物としての権能を天体と共有し、暴れ回る精神体としての原初の動物たちが水の惑星での共存と生存が可能となるよう月の進化に求められていた調整の役割を担った存在で、その者たちは現在の地球において天使としての進化を果たしている。

月の人間が地球において天使になるといった進化は宇宙全体の進化に伴って行われる。

宇宙全体の進化とは人間の完成のことである。

前宇宙紀、月での人間の完成とは精神体の宇宙への搭載と降臨における成熟の創造。

その過程を終えた人間存在であった月の住人たちで進化を選んだ者は天使として、進化を選ばなかった者は堕天使として現在の宇宙紀である地球にて再び人間活動をしている。

進化を選んだ人間は天界の自我として天使へ。

堕天使は地上の人間の精神体としてやり直しの退化へ。

進化の方向性は宇宙の消滅である休息期によって決まる。

次の宇宙の状態と立場を決定する休息期とされるその領域とは、物質の質量と膨張の度合いに秩序を与えている生命の世界のことであり、その生命の世界に受け入れられた存在は天使のような高次元での活動が可能となり、生命の世界から拒絶された存在は堕天使として低次元において新たに顕現する宇宙紀である地球の人間に搭載されている精神体の立場でかつての月の進化段階のやり直し活動をしている。

そのことと同じロジックが月の動物存在以下にも生じていた。

精神体の衝動を獲得していた私たち月の動物人間たちは強烈な運動能力とそれに伴った知性をも獲得していたことを根源の世界より観察していた私たちの一部はある堕天使存在に「神に抗え！叛逆しろ！神から自由になれ！」と誘惑されることで、根源領域の促す進化を拒否し、新たな月である地球において人間存在よりもはるかに優れた身体能力と特殊能力を性格とした動物及び植物、そして地球紀では鉱物へと退化することを選ぶ。

変化を拒み、かつての優れた能力に執着した、月の生態系の姿が現在の地球の土台なのだ。

地球とは月の環境が新たな進化段階で姿を変えたやり直しの世界なのである。

例えば動物存在は地球の重力である月の生命力に依存しながら精神体としての使命をやり直している最中にあたり、その種は原生、腔腸、棘皮、尾索、軟体、蠕虫、節足、魚類、両生、爬虫、鳥、哺乳類として同列の進化過程に並んでいる。

彼らは退化存在だが、地球の人間進化の礎であるという意味で犠牲的進化の過程にいる。

誤解を恐れずに言えば、家畜やペット等が最もわかりやすくそれにあたる。

羊や豚、牛に鶏は人間のため無理やり繁殖されてはいるのですが、動物たちと人間の高次元の自我である精神の根源が両者の間に、それでいい、という相互作用が働いている。

彼らは彼らの高次元の精神で人間と共に進化を選んでいる。

ついでに言うと、人間の胎児が母胎の中で魚類から哺乳類までの進化の過程を辿って人間の肉体を有した赤子として誕生するプロセスというのは、地球において人間がかつて動

物から進化した名残などではなく、地球進化の過程でその選択を拒否してきた通過の名残りなのであって、人間は一度として現在の動物であったことはない。

人間は宇宙進化の過程の原初から常に人間をやり直し続けているからだ。

かつての月の動物体とはあくまで私たちの精神体に由来する衝動の原型のことだ。

つまり、地球の動物とは現在の人間が前宇宙紀である月で脱ぎ捨ててきた精神体の成れ果てであり、彼らの精神体の種の本体は獣帯と呼ばれる黄道十二宮の星座の領域に存在している。

獣帯とは一二ヶ月毎に太陽と対極の空に位置する歳差運動の示す天の川の果ての向こう、銀河の外を故郷とするかつての月の時代に私たちも滞在していた虚数的な領域のことだ。

ポール・ディラックの発見した反物質がマジョリティの世界が存在するのだ。

反物質とは物質現象と常に対になって存在し、絶えず消滅している側の粒子のことだ。

反物質は全粒子に存在するが私たち精神体の認識世界では最も希少価値の高い物質としてしか確認できず、存在した瞬間に元の物質と反物質による対消滅現象によってビッグバン的な宇宙創生にも似たエネルギーを生成するとされているが、それは仮説に過ぎない。

反物質とは生命エネルギーのことだからだ。

生命エネルギーとは元素同士の電子の交換による原子核側の「プラスを発生させている領域内」のことであり、私たちの世界がマイナスの電子による相互反応側の流れで現象化したものを認識できる、という事実の現実は生命側にとってはもうすでに対消滅を終えた状態、つまり物質領域に存在する必要のなくなった生命側の存在たちが私たち精神体の活動領域を認識可能な状態にしてくれている。

言い換えるなら、プラス側からマイナス電子として投影している、と言うことだ。

さらに言い換えるなら、宇宙空間の真空やボイド、太陽系外の銀河等は反物質領域で、マイナスの元素反応が存在せず、それでも空間秩序が存在できるのはプラスの作用がマイナスの存在を対消滅させてきた名残り、ということだ。

そして、私たち精神体もまた同様にすでに地球進化段階以前に対消滅を終えた恒星領域に存在し、感情の記憶を覚醒状態の際に行き来させてはいるのだが、動物ではない進化の道を選んだ地球の人間の精神体は本来天使に進化しているはずの堕天使が地球進化のある過程段階で人間の脳組織である神経回路を神の使いである天使存在から奪い、支配することで月軌道領域内に閉じ込められている。

脳によってプラスからマイナスの現象しか認識できないよう反転させられているのだ。

よって電気という現象は堕天した生命力のことなのだ。

それにより私たち精神体の認識は無限の宇宙という物質領域を見せられている。

同時に地球以外には生命の痕跡すら見出せない。

だから宇宙には生物が存在しないという幻想を抱かざるを得ない観測しかできていない。

まったくの逆だ。
人間の観測している宇宙そのものが死の世界なのだ。
真の生命とはその宇宙を出力し続けている根源にしか存在していない。
物質のミクロの核が見えない。
宇宙の果てを観測することができない。
すべての始まりと終わりの証明ができない。
生まれた時のことも、死を迎える時のことも、実際には当人にしかわからないだろう？
そういうバイアスのかかった精神によって生命の価値が逆転しているのだ。
宇宙進化の進退及び交替とは私たちの眠りと目覚め、死と誕生のことだ。
このロジックをもっとわかりやすく言うと、私たち精神体が「起きている」と呼んでいる状態とは生命の世界から拒絶されたことによって目覚めている、ということだ。
逆に言うと、私たち精神体が「眠っている」と呼ぶ状態とは物質的な肉体という場において不在を意味し、目を閉じている、その眠りの状態とは生命の世界において進化の方向性についての確認と準備が行われている段階のことで、ゆえに私たちの肉体の細胞は毎日毎瞬間繰り返しているその眠りに安らぎを覚えて、与えて、感じるのだ。
私たちが最も恐れている「死」も同様だ。
細胞はアポトーシス現象にて常に死に向かい、新たな細胞にスペースと役割を与える。
私たち精神体が肉体を通じて共有している物質のふりをさせられている元素たちの本質を生命としての認識によって改める活動が終わるその日まで死と再生による誕生、からの誕生からの死の物語は肉体の命が終わるまで続く、ある種の呪いのような現象を、量子もつれとして細胞と反細胞的なペアとなって体験することとなっている。
つまり肉体的に私たちは常に死にながら生まれているのだ。
しかし、私たち精神体はそれが融合的で連続的すぎて識別しきれない代わりに、自分以外の誰かの精神体が肉体での活動をやめた、あるいは終えた消滅状態だけがわかってしまう。
それは人間だけの経験なのだ。
人間以外の動物や植物や鉱物にとっての命と死の議論には意味がない。
なぜなら人間を含めた全ての物質は生命エネルギーの背後的な一要素に過ぎないからだ。
原子核、細胞核のプラスの背後から物質的な現象を出力している存在だから。
でも人間の精神体だけが「死」を体験することとなる。
なぜなら精神体の本体が自我を連れて生命が相転移した死の領域にダイブしているから。
精神体の核である自我が完全にマイナス側の観察点にいてプラスを忘却しているためだ。
脳の世界に閉じ込められている私たち精神体は物質しか見えない方向性の認識により自分自身の本質が決してわかることがないよう脳の癖によってフィルタリングされている。
宇宙空間として展開されているすべてが生命エネルギーであり、夜空に輝く恒星の全てが全ての生物の精神体の根源であり、その光の届く全ての空間が精神の階層なのだけど、その精神の要素の本質を語れば笑い者にされるよう堕天使に脳神経のプログラミング改変に

成功しているため私たち精神体には対象の表面以外の多くが見えない。
仲間から外れた対象に関心がなくなったり、嫌悪感を覚えるいじめ的な本質がこれだ。
抜けた髪の毛、皮膚に滲む汗、切った爪、鼻から出た体液、出血、尿や糞便、これらはどれも煩わしく、人体から出ていく代謝物や排泄物等は人間の内側からのものであればあるほど、グロテスクな対象として、あってはならないもの的な印象を抱くようになっている。
一方で不必要な部分が切り離される瞬間はどこか放心的に心地よかったりもする。
いじめ、社会的弱者、異端者、非常識でマイノリティな論理やアイデアへの態度が無くならないのは本質的な因果は二つの意味合いが重なっている。
一つが生命だったものを汚物とする脳の愉悦＝都市設計と人間格差による生命の隠蔽。
もう一つが生命だったものによる再生と持続の循環＝生命が拒絶した要素の残留物。

私たちが見ているものとはそういう世界のことなのだ。

私たちの脳に投影されている世界の全ては私たちが置き去りにしてきた過去のやり直し。
私たちの瞬間が全て過去であることの解釈の本質はもうすでに終わったことの連続。
幾重にも重なった宇宙の過去の投影を私たち精神体は観察している残留物の世界なのだ。
動物たちが前宇宙紀に精神体の形成を目指した月の名残だとしたら、植物もまた同様のロジックによって複雑な進化と退化のす通過過程を経ていて、現在地球の地盤を形成している存在は私たち人間の肉体の皮膚であり骨格でありを共有している最も古い進化と対価の過程を繰り返してきた、どちらかというと退化の局地に位置する存在によって宇宙のエネルギーは全て物質として「投影、反映」されている。
そのことを最も顕著に記したのがアインシュタイン方程式のＥ＝ｍｃ２だ。
Ｅ＝エネルギー
ｍ＝質量
ｃ２＝光速の２乗
この方程式は重力は質量にい比例し、質量はエネルギーと等価であり、熱や光が物質化することも物質を熱や光に変換することが可能であることを証明したもので、核分裂と核融合でエネルギーを取り出す原理の根幹を成した理論として世界で最も知られている。
質量保存の法則を書き換えた方程式でもある。
簡単に言えば質量はほぼエネルギーであることを考慮しなければならないという意味だ。
そして、私たち精神体は質量が何であるのかも見ることができない。
現代科学は電子だけでなく、質量の総量の辻褄を合わせることがまだできていないのだ。
原子核は陽子と中性子の数で質量が決まっているとしているが、それよりもさらに小さい素粒子の総量を合わせても原子核が予め持っている質量の１％ほどしか満たしていない。
質量を与えているとされるヒッグス粒子の対象は素粒子に対してであり、質量ではない。
質量の９９％は原子核内で素粒子を中心に向けて閉じ込める「強い力」によるエネルギー

をＥ＝ｍｃ２に換算することによって理論値通りの質量が確認されるのだ。
これを地球の質量に例えると生命体になる。
人間の質量に例えると重力となる。
宇宙の質量に例えるとダークエネルギーである。
ダークとは、存在しないけど存在することにしないと困る辻褄合わせの謎の力のことだ。
実際に物質の原子核の質量が持っているエネルギーが大きすぎる事実がそうさせている。
Ｅ＝ｍｃ２は理論的にも現実的に正しいことが科学者の悩みの種なのだ。
つまり、Ｅ＝ｍｃ２が示すように物質とはエネルギーの一部が姿を変えたものなのだ。
先に結論を述べてしまうのであればエネルギーとは霊的な生命力のことだ。
中心に集まり、秩序を形成し、球体化しようとする方向性は生命体からの諸力にあたる。
地球の形とおっぱいの乳首の形の意味は同じということだ。
だからかつての月の力である生命エネルギーは現在の地球の生命力として内部に存在。
私たち精神体にはそのエネルギーの領域を見ることができないようになっている。
このことは自発的対称性の破れと呼ばれるエネルギー現象にも相当する。
南部陽一郎博士がノーベル物理学賞として評価された学説で要は相転移のことだ。
物質の多くは対称性を有しているがその内部ではエネルギーが高い状態から低い状態へと移動することで物質は積極的に対称性を破ってきた歴史があることを説明している。
原初の宇宙がエネルギーとして出現したときにはすでに対称性は破れ、エネルギーはどんどん低下及び拡散していくことで光や空気となり、さらに相転移を繰り返しやがて液体としてのかつての月の状態が展開され、現宇宙紀では液体としての自由度を失った土へと変容した進化段階を迎えているのが地球である、という流れに私たちは存在している。
つまりエネルギー状態の観察的立場でいうと割と最底辺に近いと言えるわけだ。
本来の私たち精神体という主体は質量を獲得する必要のなかった「強い力」や「弱い力」といった物質に秩序を与える側での観察が可能であったのだが、実際は天使以上の根源にも匹敵する権能を有した堕天使が進化の過程で常に神々に抵抗する働きかけを各宇宙紀で行ってきたことから現在の私たち精神体は生命のエネルギーの領域に相応しくない部分と関係することを生命状態としての観察の立場を選んでいる。
観察者はより高い位置から低い位置の対象としか理解と見聞を交わすことができない。
高いマンションに住む人の暮らしがわかりにくように高次元も同様だということだ。
上は見えない。

だから私たち精神体には自分はおろか誰の「心」も見ることができない。

脳が物質認識を強制しているから自分は肉体だと信じ込まされているからだ。
自分が下だと思っていることしか見えない、わからない。
でも私たち精神体には知性であり、心があることがかろうじてわかる。

影のようなものとしてギリわかるのは、文字通り私たち精神体の存在は影だからだ。
私たちの精神体の作用が自分であると思わせている存在が背後にいるからわかるのだ。
それが太陽であり自我だ。
太陽の光が地球の私たちを照らし影を投影するのと同じように、私たちの人体の脳を住処とする精神体の存在と実存を確かなものとしているのは心臓を由来とする生命の光が絶えず観察している生命状態を脳の世界では太陽をしているのだ。
太陽は「自我」として精神体が活動可能な環境を太陽系と人体内に同時に存在している。
私たちが精神体を通じて肉体活動をしている中で「自分」が人間であり、人間の中の「自分」という識別的な認識体系を提供しているのが自我である。
仮に別の動物の精神体に自我が背後に立つようなことがあればそいつは動物人間となる。
記憶喪失になった人間が目を覚ました時に「私は誰？ここはどこ？あなたは誰？」という現象はその人間の脳及び肉体の精神体の背後の自我による、私と誰か、ここととあそこ、とを自分を中心に対象を意識できる自我作用の反射なのだ。
赤ちゃんの自我が未成熟なのは、脳が未成熟なのではなくて、私たち精神体がリセット状態であることによる、ということだ。
時折、胎内記憶や大人の視点で誕生時のことを想起できたり、前世の記憶を有していたり、認知障害を有していたりの症例は精神体の状態に由来しているからで、人間の赤ちゃんの肉体は誕生した姿においてすべて平等であり完全なのだ。
脳があれば誰でも人間なのかと言えばそうではないのは運動を司る精神体の背後の存在がどの種の自我なのかによって次元の位置が違う、ということだ。
人間の精神体だけが人間の自我を生命体の肉体にまで降ろすことができる。
その因果は私たち精神体がかつての月で動物的衝動による生命状態のままでいるという誘惑を振り払い、より進化した存在である思考する人間に近づくことを選んだからだ。
人間が他の生物よりも肉体的に弱い事実はこの精神的進化の選択と関連している。
だから私たち精神体は自我を獲得した動物的な生物の霊長として活動できているのだ。

つまり太陽にも住人が存在するということだ。

私たちはその存在のことを天使及び高次元存在と呼んでいる。
人間本体の諸力である自我とは太陽系と人間の人体構造の中枢の働きかけそのもののことで私たち精神体が生きているという「時間」を獲得しているその根源を意味している。
私たちの宇宙の根源は熱という非物質のエネルギーが自我に提供されることを起源に変容し、現在の私たち精神体はその熱エネルギーの変化のことを熱力学第二法則及びエントロピーの増大と呼び「時間」のことであるとした、その存在が私たち精神体が輪廻の過程で出会わなければならない神の使いである第七位階の高次元存在、権天使だ。
権天使は時間霊、時代霊、根源霊とも呼ばれている人間自我の神でもある。

私たち人間の原初の存在であり、熱の宇宙において「時間」という人間状態で物質宇宙の始まりを現在の私たち精神体も有している「私」という主体による進化の観察体を担う、それが熱であり時間という自我だった。
自我とは物質宇宙では熱エネルギーとして現象化している。
地球紀での人体では血液及び心臓として反映されている。
つまり、太陽として存在することで、その向こうの自我の階層へと繋いでくれる神だ。

やがて熱から空気が生成される新しい宇宙紀が始まった時、自我は「時間」でありながら「生命」という役割を付与されることとなる。
空気から煙が、煙から光が反射するという要素が空間に太陽を生じさせる役割を果たす。
その手助けをしたのが権天使の使いである第八位階の大天使と呼ばれる高次元存在が人間だった頃の時代にあたる。
大天使は火の霊、生命霊、境界霊と呼ばれている人間の輪廻を審判する神である。
熱と光と空気の時空間を担う自我存在を背後に物質宇宙の植物の萌芽である生命体の役割を人間植物のような状態での精神活動の始まりを現在の私たち精神体が有している「私」という主体による進化の観察体を担う、それが空気であり光の反射という生命だった。
生命とは物質宇宙では反射として現象化している。
地球紀での人体では腺組織及び遺伝子として反映されている。
つまり、金星として存在することにより死後と誕生の精神のカルマを管理している神だ。

やがて空気の時代が圧縮されて崩壊を迎えた末に、水が生成された新しい宇宙紀が始まった時、自我は時間であり生命でありながら「運動」という役割を付与されることとなる。
それはある犠牲的な意志が熱となって現れたように、その熱が徳と光の恩寵を受けて空気が出現し、この時代ではある諦めと拒絶が太陽と空気の対立に現れ、その反動で水が発生し、その水の運動の中に液体の要素が空間に月を生じさせる役割を果たす。
その手助けをしたのが大天使の使いである第九位階の天使と呼ばれる高次元存在が人間だった頃の時代、地球の前宇宙紀状態のことだ。
天使は守護の霊、薄明の霊、橋渡しの霊と呼ばれ、人間の元素状態を管理している神だ。
熱と光と空気に水を加えた時空間を担う自我存在を背後に物質宇宙の動物の萌芽である運動体及び精神体の役割を人間動物のような状態での精神活動の始まりを現在の私たち精神体が有している「私」という主体による進化の観察体を担う、それが水であり未来への憧れを表す運動であり精神だった。
運動とは物質宇宙では精神として現象化している。
地球紀の人体では脳組織及び神経細胞として反映されている。
つまり、月として存在することにより地球上の元素の神として生命の秩序を与る神だ。
※繰り返すが空に浮かぶ月は地球の生命体の抜け殻で本質は外ではなく内にある。

やがて水の時代がより重たい状態への負荷によって収縮崩壊を迎えた末に、鉱物が生成された新しい宇宙紀が始まった時、自我は時間であり生命であり精神でありながら「肉体」という役割を付与されることとなる。

肉体という物質体は地球という宇宙状態で初めて出現した体のある種の完成形である。

原初は熱人間（時間体は権天使の人間時代）、太陽の時代では植物人間（人間植物は大天使の人間時代）、月の時代では動物人間（人間動物は天使の人間時代）、そして地球の時代では物質人間（人間物質は次の天使の人間時代）であり、私たち地球の人間とは宇宙進化の観察体として過去と未来の全ての世界が集中する焦点を認識している。

何を上位とし、自分を何とするかの自由が、地球で選ばれている。

その認識のことを対象認識と呼び、物質を対象として空間に生じさせる役割を果たす。

その手助けをしているのが天使の使いである第一〇位階の高次元存在の意識である自我という「私」の主体が地球という償いの惑星にて人間存在として降臨している段階にあたる。

人間は自由の霊、償いの霊、克服の霊と呼ばれ、「人間の悪の使命」を浄化している神だ。

悪の使命とは善を強化するために行使されている行いのことである。

それが自由の本質だからだ。

私たち精神体は自由霊を背後にした「私」という自我の主体を地球で獲得している存在にあたり、地球の進化段階である全ての宇宙進化を濃縮した物質現象を自分以外の対象として自由に認識することのできる権能を当たり前のこととして搭載されている。

実は「私」という主体を提供している権能は神々の意識の中枢のことだ。

私たちの精神体はその影響を肉体と生命体と精神体を通して受けている影だ。

ただし、進化の道を選んでいる自由の霊として自我を有した精神としての人間だ。

つまり、私たち精神体は自由の霊と呼ばれる自我から自由についてを学んでいる存在。

肉体及び物質とはそのバリエーションの全てであることから私たちにはその対象を自由な解釈と自由な角度で自由な表現を許されている観察体をしている。

だから自由についてを勘違いしてはならないのだ。

まず、自由とは宇宙進化の説明書に則って適応し、清く、正しく活動することではない。

自由とはそれらとは真逆の発想と行動を見出した時にのみ得られるもの。

自然環境に従順に、機械の仕組みのようにスムーズに、あらかじめ定められた人間の肉体や社会が作り出したルールに倣うことからもっと自由になる意志、もっとより良く対象との関わりを考えることのできる可能性のことを自由というのだ。

ゆえに私たち精神体は進んで悪になる自由が許されている。

私たち精神体はまず対立する悪に染まることからしか始まることしかできない。

そして、その対立する悪とは行き過ぎた善によって見出されていることから、行き過ぎた善による教育である悪を自由をもって克服しなければならない。

悪とはつまるところ自由を獲得する肥料なのである。

畑には馬糞の類である堆肥と肥料を撒かなければならない。
堆肥は臭いけど、酵素として、土壌に栄養を与えるべく「最初に」撒かなければならない。
要するに、悪は人間の自由度を高める、という課題を担っていることとなる。
私たち精神体の考える対象世界は行き過ぎた善の所業によって在ることをまず知らなければ本当の自由を獲得することはできない、と宇宙はシナリオを構造化し、それを物質であり肉体の「崩壊」という死を本質とした時間的な運命と、何度も繰り返すことのできる生命の記憶と再生による歪みである地球の重力（生命）領域への誕生の輪廻に委ねているのだ。
自由とは地球への転生の意志である、ということだ。
しかし、私たち精神体の自由とは始めから与えられているのではなく、その目に見える物を通じて、それが善なのか、悪であるのかの自由な選択が絶えず与えられていることを「肉体」を通じて学び、理解し、不自由な精神を克服しようとしている過程を意味している。
さらに重要なのは、人間が悪を克服したときに自分が自由を知る進化のために選ばなかった道や対象を反面教師の犠牲として突き落としてきた被造物を解放するまでが進化の意味であることを私たち精神体は実践しなければならない。
それが悪の使命から成る自由の真理なのである。
肉体がそのことを教えているのだ。
そして、肉体とは神々が悠久の時を経て築き上げてきた叡智の結晶であり神殿。
ゆめゆめ自分のものであるなどとは考えてはならない神聖な器であり機会なのだ。
私たち精神体はそのことを与っていることをまず知ることから始めなければならない。
遅すぎることというのは決してない。
なぜなら時間は幻想で自由の意味と価値を理解するまで無限に隣人との関係が続く。
隣人とは幻想の中で肉体として物質宇宙における自我の似姿として現象化している。
地球紀とは宇宙で初めて物質が出現し、熱と血液の硬質化による骨格として反映される。
つまり地球として存在し観察する対象そのもの全てが枝分かれした人間の神体化の反映。

その反映を出力しているのは太陽だ。

太陽の光（人間自我）が人間の精神体のための認識を提供しているのだ。
太陽系と地球は太陽の中枢によってプランニングされた宇宙進化の一部を投影している。
太陽の中枢とは神々の住む階層への入り口であり、私たち精神体が目指している場所だ。
その領域は物質と対極の虚数及び反物質といった質量の方向性が真逆の世界。
私たち精神体の認識している方向性はプラスの陽電子からマイナスの電子が押し出される方向で広がっているマイナスの世界であり、太陽の核融合の中心の向こう側ではマイナスの物質光が反転したプラスの世界が階層を連ねている。
幾階層もの無限の自我領域の神々が光速の向こう側から私たち精神体を呼んでいるのだ。
光速では時間が縮むとされている。

光速に近づけば近づくほど周囲の時間と空間を置き去りにする。
いわゆる浦島現象が私たち精神体の認識でも確認されている。
これは正確には無限遠点と呼ばれる宇宙の境界を超えての次元変更が行われている。
光速を体験した私たち精神体にとっては加速という認識しか自覚することはできないが、加速した、という認識までの間に自我による跳躍の調整が行われている。
時間のための熱エネルギーの調整がそれらを生んでいる領域で行れているという意味だ。
要は光とは速度ではなく、次元反転の境界なのである。
時間と熱の有無の境界のことだ。
つまり、境界の扉はどこにでも存在しているという意味だ。

最初に言葉があった。

それから「光あれ！」と続く聖書の創世記冒頭の文言だ。
最初に境界の向こう側からの言葉があったのだ。
この宇宙が光として現象化する前に文字通り最初に言葉から創造された。
言葉であり振動というエネルギーが予め存在したことによってこの宇宙のエネルギーが放出され、それがやがて熱から物質となり光となって地球に至るまでの進化を辿ってきているのだ。
つまり、音という情報が少なくともこの宇宙においては先んじているということだ。
そして、音による振動は物質に形を与える諸力を有している。
このことは『グラドニ図形』が明確に示している。
クラドニ図形とは、エルンスト・クラドニ博士にちなんだ物体の固有振動を可視化する方法で、砂状の粒子にある一定の振動を加え続けると幾何学的な図形を形成するというもので、波長が短くなる、あるいは音が高くなるほど幾何学構造も細かいものになっていく、また周波数同士で共鳴しながら形を秩序あるものとして出現させる。
私たちの声に影響力があるように、周囲に存在する全ての存在は周波数によって互いに影響を与えながら環境を形成している状態が現在では物質の構造を実現させている。
その影響力は宇宙開闢以前のエネルギーを由来としているのだ。
ビッグバンの根拠となっている赤方偏移や宇宙背景放射等はこの音の反響のことなのだ。
またビッグバンはどこから起こったのかの矛盾点はブラックホールの表面である事象の地平面や私たちの身近な物質及び太陽の核融合を引き起こしている素粒子領域のミクロの観測のように特異点という扱いになっているが、それは人体の構造も同様なのだ。
私たち人間の健常体での内部構造は物質的な測定のできない特異点となっている。
人体解剖や胃カメラ等による医学認識である解体新書には観測選択効果が働いている。
観測選択効果とは量子の二重性にも言及される。
量子の二重性での光子、電子、元素粒子は、私たち精神体が観測を行なっていると粒子と

しての物質形態を成し、観測を行わないデータでは波としての現象を示すことで特定することのできない振る舞いをする。
このことは人体内の生命環境でも同じことが現象化している。
私たち精神体が目を開けて覚醒しているときには視界に物質の世界が広がる。
私たち精神体が目を閉じて意識を失っている際にはその視界は暗く閉じられ、夢を見たり、見なかったり、時間の概念がなくなると、あっという間に朝を迎えている。
私たち精神体は意識を失うと波動として肉体を離れ、宇宙に拡散している。
それは波という振動のエネルギーを発している生命の領域によって促されている。
生命が意識を発している脳である私たち精神体を眠らせているということだ。
だから生命によって殺されないよう地上に永遠の生命を創り出すことが脳の夢なのだ
生命は過剰に神経活動を行おうとする私たち精神体をたびたび阻害する働きをしている。
それが重力となって私たち精神体の自由すぎる動物的衝動を制御しているのだ。
私たち精神体は生命体から記憶と知性を取り出し、肉体における自由を声に出して、自然と肉体を超越すべくその創造性の開花を地球での使命を担って人間をしている。

神に抗え！自然に従うな！自由を謳歌せよ！という声に導かれて・・・

そう宇宙を計画した存在がいる。
彼らのことを根源叡智と呼ぶ。
天の使いである神霊たちの神である根源叡智の要素は三位一体。
地球（星）が母だとするならば、宇宙は父であり、生命は母と父の意志を継ぐ子供のこと。
私たち精神体が宿ることの可能な地球の生物は地球の細胞のような存在にあたる。
母なる大地（星）は宇宙（根源）に由来を持ち、子（生命／元素＝神霊の眷属）は母なる大地に育まれ、やがて父や母となる。
父は宇宙を計画し、母はそれに同意するが、父も母も一人ではなかった。
宇宙を計画したとある偉大な父はその創造のテーマに既存の神々を超越した新しい神の二つ名に自由の神霊を冠した創造のための提案を掲げた。
父と母と子という三位一体の神の眷属である神霊は皆偉大ではあったが、それぞれが三位一体の一部であり、その一部である神霊たちは根源たる三位一体の掲げてきた過去の宇宙によって創造された根源の意志そのもの。
つまり、根源の眷属たる神霊は偉大な法則による役割があるだけで自由意志という概念を知らない神として存在する神の一部に過ぎないままに個という役割を有した存在だった。
父なる根源は彼らに自由を提供するべく創造としての宇宙を計画した。
膨大なエネルギーである熱を存在への意志として与えてみたものの、全てが自由であったため自由の意味すらわからず、ただその現象に従う自由だけが時間として実行される。
その時間をエネルギーとしたことを契機に進化のための実験が少しずつ実を結んでいく。

そうやってシュミレートされた新たな宇宙の始まりと終わりが無尽蔵に繰り返されたが、計画は過去に起こり得た確率の収束の域を出ることはなく、その終わりは三位一体の始まりの計画のもとに戻っては新たにシュミレートすることの繰り返しの歴史が無限に折り重なり、広がり続ける模造が宇宙の残滓となることで次元的な階層を成していった。

神々はただ忠実に根源たる計画の意志の熱に従うことのみを繰り返した。

それが眷属たる神霊の存在意義だった。

その過程で多くの神々が創造されるも自由を知る神霊が創造されることはなかった。

三位一体が抱く自由とは、自らのように計画を発案し、自らのように創造を実行し、自らのように自分で考える自由を表現できる存在から自らの想像の範疇を超える新しい宇宙を創り得る自由を有する存在のことだった。

矛盾なく、効率よく、順応と適応に慣れた存在ではなかった。

三位一体の父は不自由な神霊である既存の神々に飽き、退屈し、失望する他なかった。

限度を知らない繰り返しに葛藤という疑問の概念を持たない創造の眷属たちは言うまでもなく、自分自身の分身であり、鏡であることに立ち戻るたびに根源たる限界に父と母と子の三位一体は絶望した。

すべてを自由自在に創造することができるという永遠に約束された権能とその世界観に絶望した父の深い慟哭は全知全能たる自らの存在意義への絶望と憎悪と嫌悪の自由を行使してみた。

そこに出現していたのが天使における一〇番目の位階を司る自由の神霊だった。

父の計画した自由を司る神霊存在のためのプロセスはもうすでに存在し切っていた。

つまり、既存の宇宙の繰り返しの中で創造された父の分身たる眷属の神々は自由の神霊が自由の神霊になるまでのプロセスをインストールすることによって、自由とは何かのプロセスを知ることは始まりと同時に完遂されていた。

果たして父の悲願であった永遠に約束された世界は新しく生まれ変わった。

言うなれば、父の被造物たちは父であり、母であり、子としての根源から自由となった。

言うなれば、何も変わらない同じ瞬間の連続だった退屈から父自身が自由になれた。

言うなれば、世界のデフォルトが自由を得たことでパラドックスが起こったのだった。

被造物たる神々が父の創造した計画的宇宙の檻から飛び出ることで、無数の宇宙が根源叡智の領域にて新たに生まれることにより、それぞれの神霊が新たな神となって自由のプロセスを顧みることのできる無限の宇宙に参入するようになる。

あらゆる神霊がそれぞれの権能を用いて自由に宇宙を展開させるパラダイスのようなコレクション領域の量産を可能にした三位一体の最後の眷属、それが自由の神霊だった。

自由の神霊は無限の宇宙を頭、太陽系を四肢、その細胞は無数の恒星で輝いていた。

私たちの宇宙は太陽系の太陽によって照らされることで反射される投影であり幻影だ。

幻影としての私たち精神体の顕在意識とは地球のことだ。
私たちは地球をベースに対象を認識しているだろう？
でもそれは幻影で潜在的な私たち精神体の主体は恒星として宇宙の果てに追われている。
しかし、私たち精神体は太陽の反転作用のおかげで恒星から地球での生命活動ができる。
その地球の顕在意識を明るく照らしているのも太陽である。
私たちは太陽の光の反射と生命力を通じて地球の光景と宇宙を観測しているだろう？
太陽は私たち精神体の現実を確定化させることを役目としている。
そして、太陽が地球に顕在化させている思考は宇宙そのものであることもわかるな？
私たちの太陽系は紆余曲折な宇宙進化の計画的な思考に運用されてきた。
かつて人類は一つの巨大な頭であり脳だった。
その時地球は一つの頭であり脳だった。
そして宇宙が一つの頭であり脳となった。
私たちの脳は前世の肉体の骨格が折り畳まれた物であり、私たちの四肢は来世の脳となるべくその感覚を宇宙に刻印することによって、自由とは何かの経験をあらゆる宇宙と人間存在を通じて一歩ずつ根源叡智の神の領域への進化の道を切り開いていく。
次なる宇宙は地球が月に帰っていく。
生命体としての地球の記憶だけを残した宇宙紀が地球の人類の救済をかけた戦場となる。
その時地上はすでに消滅し、地球で善だった人間と悪だった人間の精神と魂による、黙示録のハルマゲドンの時代を私たちは天使と堕天使の立場で降臨することとなる。

その最果てにて完成された自由の神霊に父は問いた。

父「如何様にして全知全能の自由から独立できた？」
子「私はあなた自身のやり直しの姿にございます」
母「わたくしがあなたを全知全能である以前の忘却の奈落に蹴落としたのよ」

無邪気とも言える未成熟な子供を天使であるとするならば
欲望の化身達による世界に忠実であることしかできない大人とは悪魔そのものなのだ。
人間とは人類及び生物と生命、さらには歴史的に存在する宇宙全ての総称のこと。
その全体性の中において個別的な詳細を担う人型をした天使の化身の多くは自らが天使の化身であることを忘れている、とは思わないだろう？
だがしかし、人間という種の動物の皮を被った悪魔たちの誤りだらけの思想を疑いもせずに骨の髄まで信じていることにも違和感がないのだろう？
その結果、無数の銀河の因果の塵にも等しい認識のことを自分と呼んではいないかい？
あなたは自分の思った自分のままに死後の永遠を旅することとなる。
このヴィジョンを思い上がりと思うならば思うがいい・・・
私たちが吐き出した過去の象徴的存在である獣達の領域に辿り着きたいのであれば・・・

○あとがき

楽しい事、という対象は存在しない。
楽しい、と思う主体だけが居るだけだ。
居る、と言ってもそれは肉体的な物質としての、有るや在る、ではない。
人間の主体というのはテレビの中の登場人物や脳の中に、居る、のでもない。
テレビという箱の中に誰かがいないように、脳の中にも誰もいないという意味だ。
そのことを私たちの主体は時間の中に、居る、こと以外全部ウソであるとしている。
『楽しいこと以外全部ウソの叙事詩』とはそういったことを一つの話にまとめている。
作中で「時間」は大まかに二種類あるとしているがもちろん十分な説明にはなっていない。

一．エントロピーの増大が引き起こしている変化の連続の天体時間の世界
⬇今の連続＝全部過去：すでに終わった出来事しか存在していない世界という意味
⬇砂時計やビデオテープの中にいる状態でどんどん終わりに向かっているという認識
二．二四時間の変化サイクルに過去の思い出と明日の希望を描く私たちの感覚的な時間
⬇今しかない：今を過去と同じにしたり、今を未来への可能性としたり自由＝時間
⬇砂時計のくびれの部分からの変化、ビデオテープの再生を鑑賞している無関係な立場

相対性理論が説明する「楽しい時間はあっという間に過ぎ去ってしまう」ことの証明でも、この「時間」の相対性を明らかにすることは可能だったが、「時間」そのものが何であるのかを伝えるのには不十分としてあえてエントロピーの難解な概念を用いることとした。
質量は重力によって与えられているものではないし、重力という諸力は独立した重力単独で現象化しているものではないことをあくまで現代科学という現代人の多くが信仰している立場から明らかにするためだ。
そして、その立場から信仰している常識を疑ってもらうためである。
私たちの社会は人間たちのあるバイアスのかかった情報を礎にした信仰でできている。
また同時に自然環境もまたそのバイアスの影響下にあることにも言及している。
さらにその信仰とバイアスの根源と私たちの時間との関係性をも救済していく。
救済とはこの地球における「存在の意味」を明らかにすることに他ならない。
私たちは肉体を自分の意志で操っているという勘違いした自己認識の上で、何か困ったことがあると「救われたい、救ってほしい」などと信じてもいない神懸った何かに欲望することで自らの諸力である意志を放棄し、出来事を責任転嫁する傾向にある人が一定数いる。
考え方が間違っていると言わざるを得ない。
すべての出来事と経験は与えられるべくして与えられている。
そのすべての中には私たちの肉体とその認識と意志もが含まれている。
自分だけは自然の摂理とは無関係というとんでもない勘違いをまさかしてませんよね？

「すべて」からの叡智である自然の宇宙の中に「自分のもの」という概念は存在しない。
すべてを提供してくれている万物の創造主を前にして「そこから救われたい」などという考え方の信仰は神を裏切ることへの無知であること以外何者でもないことをまず知ることから現在の所有欲にまみれた常識を価値だとしているすべての人が始めなければならない。
もしも全存在と現象に意味があるのだとすれば価値のない対象は存在しないことになる。
すると余所者もいないし、別世界もないこととなる。
そのことを体現しているのが私たちの認識の土台である地球環境（世界は一つ）なのだ。
それでも一つとして同じ存在が重複しない次元として展開されているのには理由がある。
救いを見つけるための手段のバリエーションとしての多様な機会が提供されているのだ。
その全てがあなた自身の過去のやり直しの痕跡として別次元から演じてくれているのだ。
いわゆる反面教師というやつだ。
無数の次元が重複することで一つの認識の立場が自らの存在の意味を考えるための救いとして、あなたの意識とその振る舞いの動機を変化させるべく出現しているのが、あなたの選んだあなたに適したあなたのための世界として私たちは関係している。
あなたが何をしようとしているのかはあなたの周りが教えてくれている、ということだ。

「目に見えるすべてのことはメッセージ」とユーミンも歌っている。

そのメッセージのすべてを繰り出しているのが私たちの主体である「時間」なのだ。
私たちはこの「時間」の中で考える自由を獲得している存在にして、存在していない。
その矛盾概念を伝えるのにはいくら語り尽くしても不十分であり続けなければならない。
なぜなら私たちは個体でなければならないことの不自由さから「自由とは何か」の視点と生き様をこの宇宙に全く新しい形で提案することを使命に自由意志を有し、この地球での人間のやり直しを過去のやり直しである同胞たちに伝え切るところまでが役割だからだ。
私たち意識はAでもあり、Bでもあることを理解できないようになっている。
それが現在の人間の基本設定として脳の仕様にフィルターがかかっている。
そもそも赤ん坊のように「私がAでしかない」という始まりではなかったはずなのだ。
それがいつしか「私がAでしかない」に矛盾を感じない運命を私たちは選んでいる。
この溝にある自己認識の矛盾こそがメッセージそのものなのだ。
私たち人間の時間の神からの課題なのである。
この矛盾の意味と価値を自分のやり直しの集合体である世界の中から見つけられるその日まで、私たち人間は何度でもこの地球の誰かの運命に憧れることで考え方を誤ったところから始まる人間としての活動をやり直すこととなる。
だから『楽しいこと以外全部ウソの叙事詩』なのだ。
楽しい事、という対象は存在しない。
楽しい、と思う主体（時間）だけが居るだけだ。